



canplay

Digital Music Academy

# AI自動作曲プログラミング 第5回

ディープラーニングのプログラミング基礎

Magentaの実践的解説

Tensorflowの基礎

ディープラーニングのプログラミング基礎

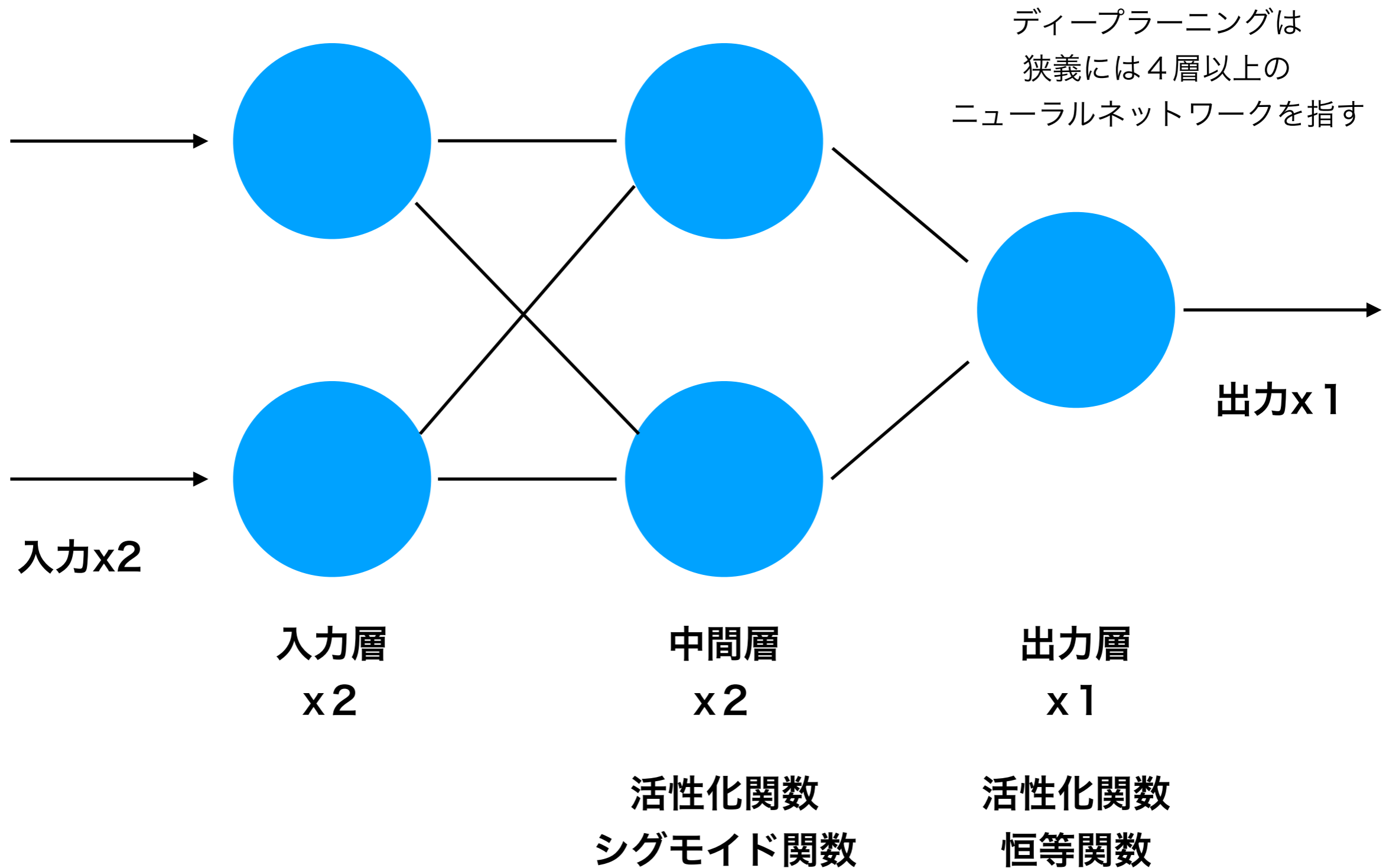
Magentaの実践的解説

Tensorflowの基礎

ディープラーニングのプログラミング基礎

ニューラルネットワークのプログラミング

# 3層のニューラルネットワーク



この3層のニューラルネットワーク（回帰）  
をコードで書くと

```

%matplotlib inline

import numpy as np
import matplotlib.pyplot as plt

# x、y座標
X = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2) # 要素数は10個
Y = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)

# 出力を格納する10x10のグリッド
Z = np.zeros((10,10))

# 重み
w_im = np.array([[4.0,4.0],
                 [4.0,4.0]]) # 中間層 2x2の行列
w_mo = np.array([[1.0],
                 [-1.0]]) # 出力層 2x1の行列

# バイアス
b_im = np.array([3.0,-3.0]) # 中間層
b_mo = np.array([0.1]) # 出力層

# 中間層
def middle_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数

# 出力層
def output_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return u # 恒等関数

# グリッドの各マスでニューラルネットワークの演算
for i in range(10):
    for j in range(10):

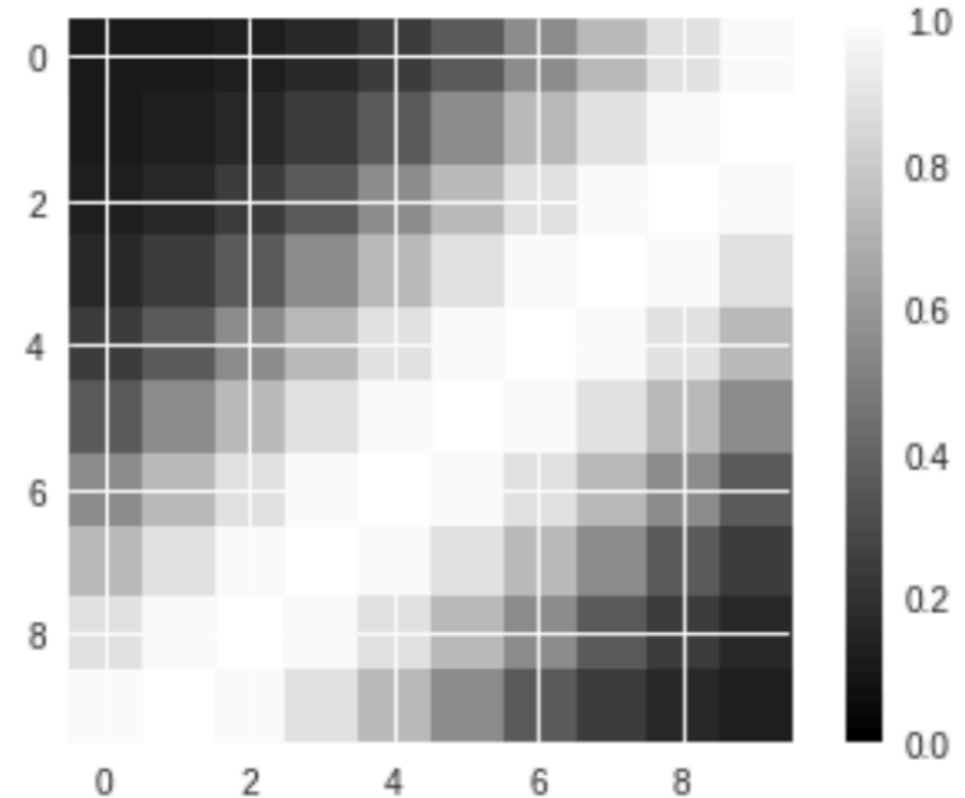
        # 順伝播
        inp = np.array([X[i], Y[j]]) # 入力層
        mid = middle_layer(inp, w_im, b_im) # 中間層
        out = output_layer(mid, w_mo, b_mo) # 出力層

        # グリッドにNNの出力を格納
        Z[j][i] = out[0]

# グリッドの表示
plt.imshow(Z, "gray", vmin = 0.0, vmax = 1.0)
plt.colorbar()
plt.show()

```

## 出力結果



```
%matplotlib inline

import numpy as np
import matplotlib.pyplot as plt

# x、y座標
X = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2) # 要素数は10個
Y = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)

# 出力を格納する10x10のグリッド
Z = np.zeros((10,10))

# 重み
w_im = np.array([[4.0,4.0],
                 [4.0,4.0]]) # 中間層 2x2の行列
w_mo = np.array([[1.0],
                 [-1.0]]) # 出力層 2x1の行列
```



```
# バイアス
```

```
b_im = np.array([3.0, -3.0]) # 中間層
```

```
b_mo = np.array([0.1]) # 出力層
```

```
# 中間層
```

```
def middle_layer(x, w, b):
```

```
    u = np.dot(x, w) + b
```

```
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

```
# 出力層
```

```
def output_layer(x, w, b):
```

```
    u = np.dot(x, w) + b
```

```
    return u # 恒等関数
```

```
# グリッドの各マスでニューラルネットワークの演算
for i in range(10):
    for j in range(10):

        # 順伝播
        inp = np.array([X[i], Y[j]]) # 入力層
        mid = middle_layer(inp, w_im, b_im) # 中間層
        out = output_layer(mid, w_mo, b_mo) # 出力層

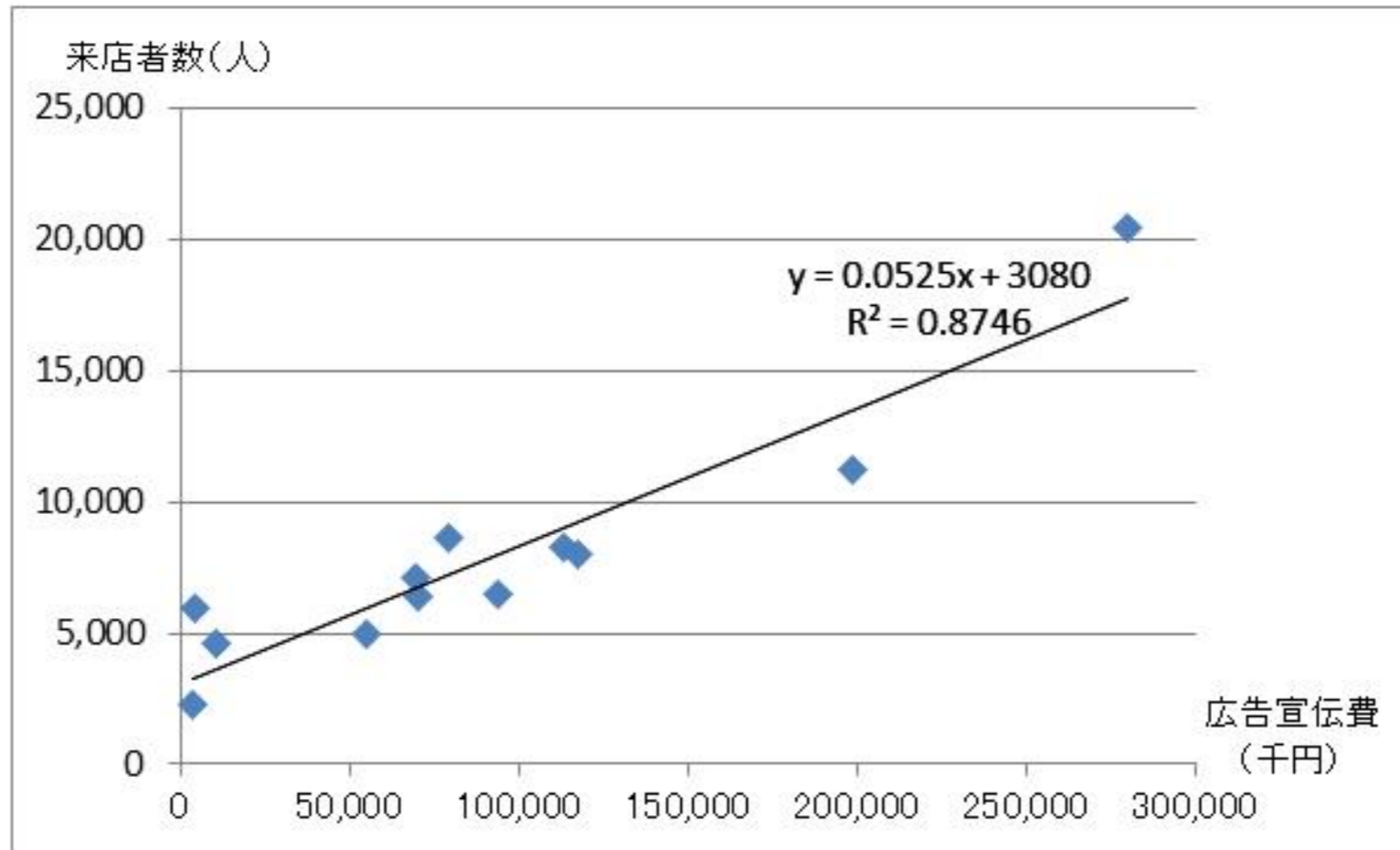
        # グリッドにNNの出力を格納
        Z[j][i] = out[0]

# グリッドの表示
plt.imshow(Z, "gray", vmin = 0.0, vmax = 1.0)
plt.colorbar()
plt.show()
```



ではニューラルネットワーク（回帰）  
のコードを解説します

# 回帰分析とは



回帰分析とはより正確に言うと線形単回帰分析です。（線形とは、グラフにすると直線になる式であることを意味する）

例えばグラフにある様に、原因＝広告宣伝費（説明変数）を横軸に、結果＝来店者数（被説明変数）を縦軸にとった散布図を作り、2つの変数が比例関係にある場合に、最も適切な直線を引く作業です。

グラフの回帰分析（線形単回帰分析）の結果は、

$$Y = 0.0525X + 3080$$

であり

$$Y = b^1X + b^0$$

という一次関数の数式になる

結果、広告費を10000円増やすごとに5人来客数が増えると予測される。

必要なモジュールのインポート

```
%matplotlib inline

import numpy as np
import matplotlib.pyplot as plt

# x、y座標
X = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2) # 要素数は10個
Y = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)

# 出力を格納する10x10のグリッド
Z = np.zeros((10,10))
```

必要なモジュールのインポートと

要素（データ）の数、出力描画用グラフのグリッド設定



## 必要なモジュールのインポート

matplotlibをJupyter Notebook  
で使用する定型文

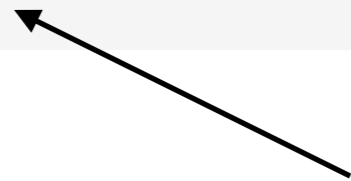
```
%matplotlib inline  
  
import numpy as np  
import matplotlib.pyplot as plt
```

計算に必要なモジュールnumpyと  
グラフ表示に必要なモジュール  
pyplotのインポート

入力層

入力に使用するx、y座標作成

```
# 入力に使用するx、y座標
X = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2) # 要素数は10個
Y = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)
```



numpyのarange関数でデータの配列 (numpyの多次元配列ndarray)を作成します

arange関数はstart, end, stepを指定できます

startの数からendの数までstep間隔で要素を作成するという意味です

(注意: endはその数 (今回は1.0) を含みません)

`[-1.0, -0.8, -0.6, -0.4, -0.2, 0, 0.2, 0.4, 0.6, 0.8]`  
が作成されています

numpyのndarrayをprint表記させるには下記の様なコードが必要です

```
np.set_printoptions(formatter={'float': '{: 0.1f}'.format})
print(X)print(X)
```

グラフ表示のため、出力を格納する10x10の空のグリッド作成

```
# 出力を格納する10x10のグリッド  
Z = np.zeros((10,10))
```

`np.zeros`は、すべての要素を0とする配列（詳細には`np.ndarray`と呼ばれる多次元を扱う配列）を生成するものです  
今回は横10、縦10の要素の値0の（空の）配列を作っています。

基本的な使い方

```
numpy.zeros(shape, dtype = float, order = 'C')
```

`shape` 配列 (1)なら1の要素を持つ1次元配列 (3,4)なら3x4の2次元配列を生成

`dtype` データ型（省略可能）初期値はfloat64

`order` 'C'または'F'（省略可能）初期値はc 多次元配列を行優先（C-style）か列優先（Fortran-style）でメモリに格納するかを指定する



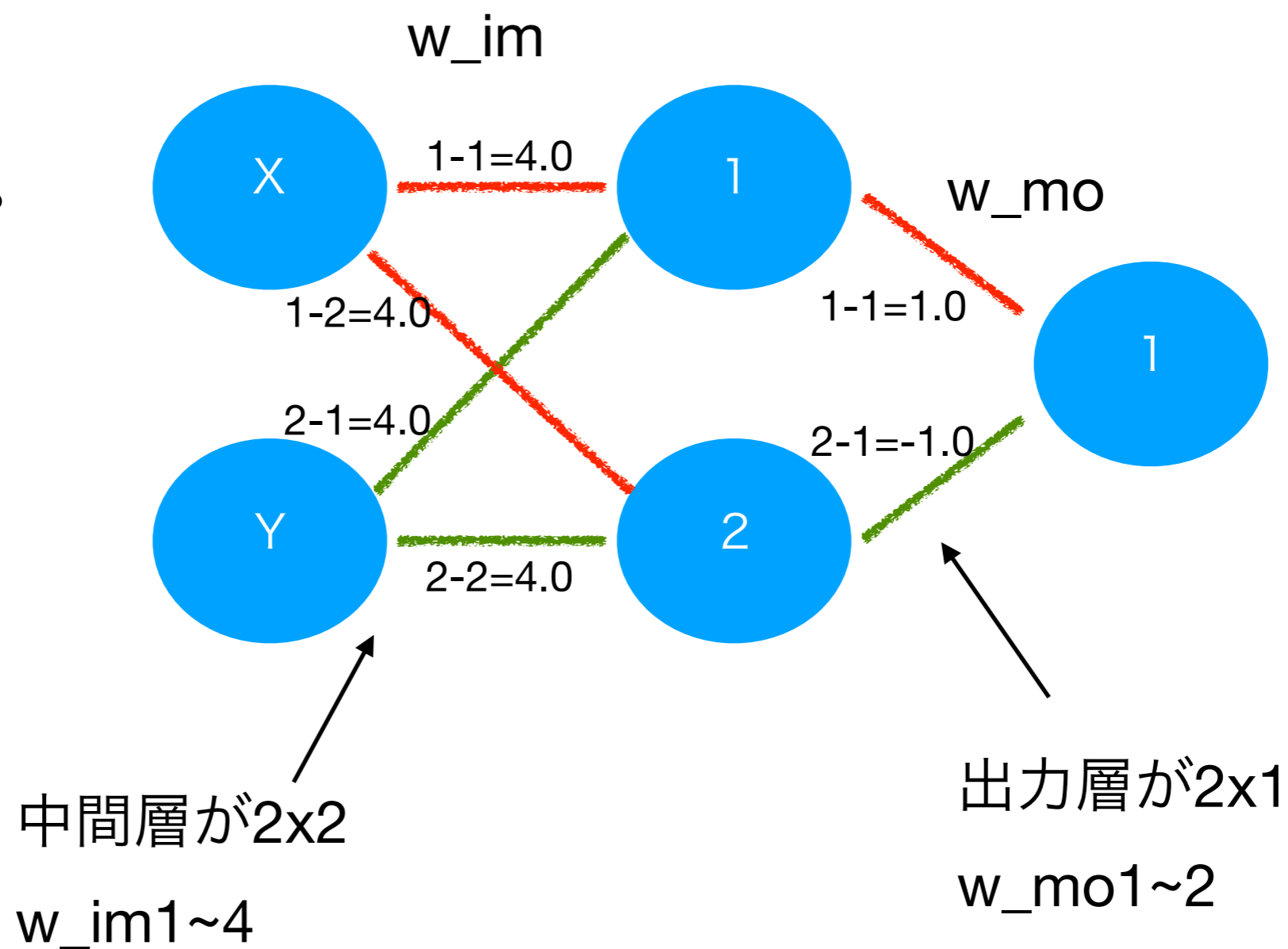
## # 重み

```
w_im = np.array([[4.0, 4.0],  
                [4.0, 4.0]]) # 中間層 2x2の行列  
w_mo = np.array([[1.0],  
                [-1.0]]) # 出力層 2x1の行列
```

重み

中間層が2x2

出力層が2x1です。



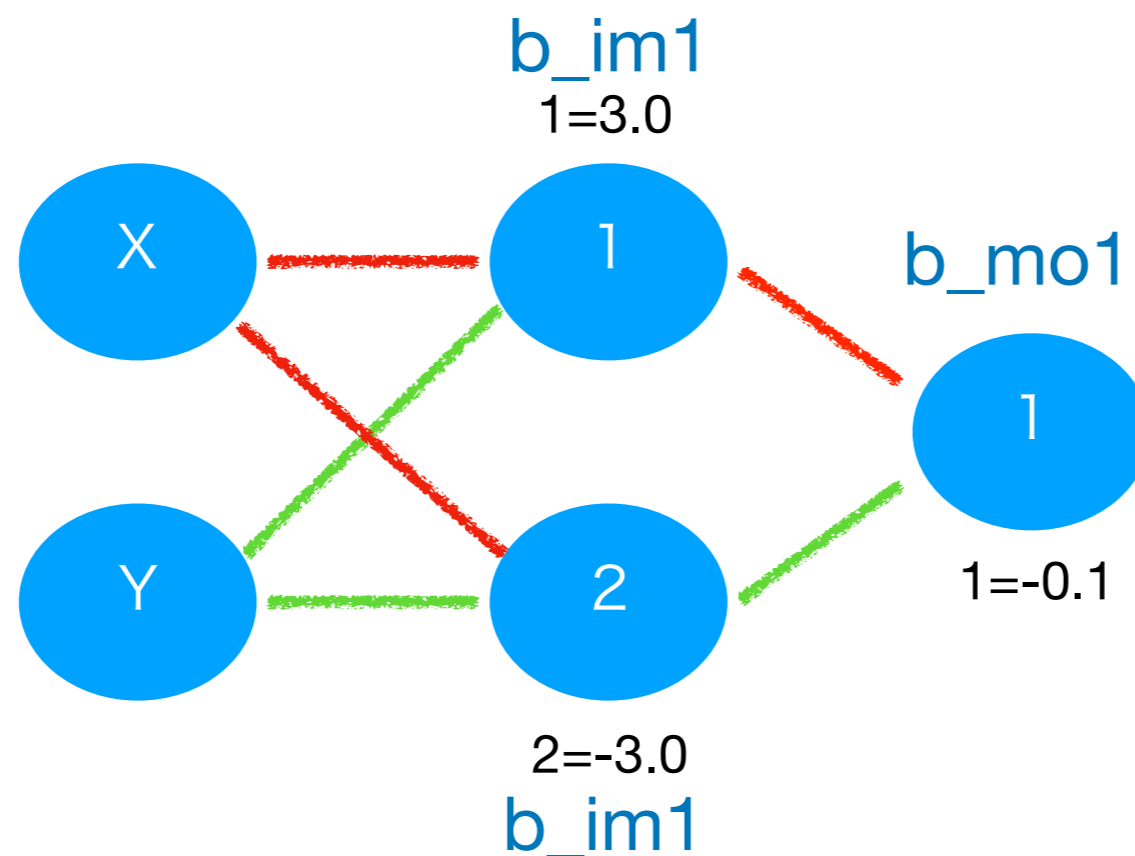
## # バイアス

```
b_im = np.array([3.0, -3.0]) # 中間層  
b_mo = np.array([0.1])     # 出力層
```

バイアス

中間層が2 出力層が1です。

バイアスの数はニューロンの数に等しくなります



中間層



```
# 中間層
def middle_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

中間層は入力データ(x)、重み(w)、バイアス(b)を受け取る

numpyのdot関数を用い、行列wとベクトルxの行列積（入力と重みの積の総和）を求め、バイアスbを足す

そこで出た結果uをシグモイド関数に入れる

スカラー、ベクトル、行列、テンソル

## スカラー

通常の数値です。

1

2

100

pythonのプログラムで

a=1

b=1.0e5

などもスカラー

## ベクトル

スカラーにある向きをもって並べたもの

横に並べる = 横ベクトル

縦に並べる = 縦ベクトル

$$\vec{a} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

$$\vec{b} = (-2.3, 0.25, -1.2, 1.8, 0.41)$$

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ \vdots \\ p_m \end{pmatrix}$$

$$\vec{q} = (q_1, q_2, \dots, q_n)$$

numpyのarray関数で  
この様に作成できます

```
a = np.array([1, 2, 3])  
b = np.array([-2.3, 0.25, -1.2, 1.8, 0.41])
```

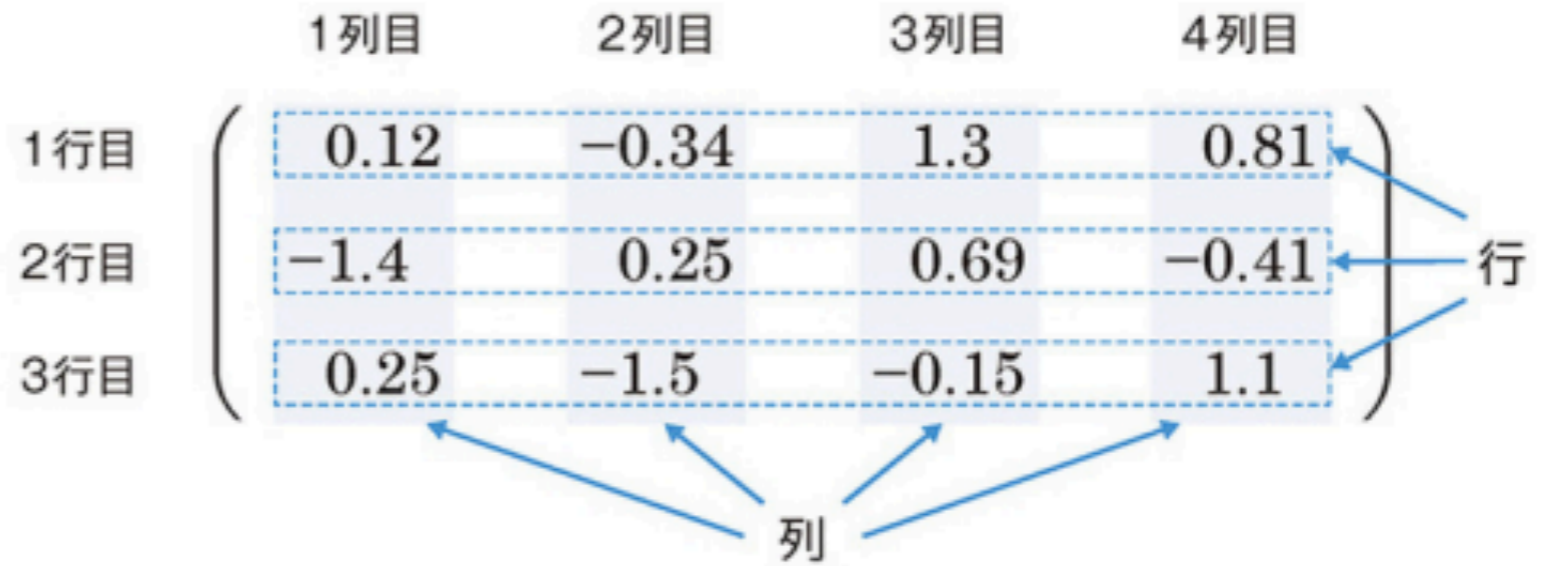
# 行列

スカラーを格子状に並べたもの

水平方向を**行**

垂直方向を**列**

と呼びます



$$A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 3 & 4 & 5 \end{pmatrix}$$

$$P = \begin{pmatrix} p_{11} & p_{12} & \dots & p_{1n} \\ p_{21} & p_{22} & \dots & p_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ p_{m1} & p_{m2} & \dots & p_{mn} \end{pmatrix}$$

[[行 · · · · ]

[行 · · · · ]

[行 · · · · ]]

スカラー (行) を[ ]で囲み

縦の並び (列) の積み重ねを[ ]で囲む

```
a = np.array([[1, 2, 3],  
              [4, 5, 6]])  
b = np.array([[0.21, 0.14],  
              [-1.3, 0.81],  
              [0.12, -2.1]])
```

2x3の行列

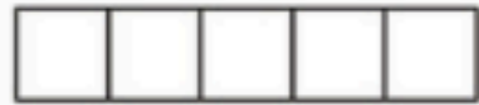
3x2の行列

# テンソル

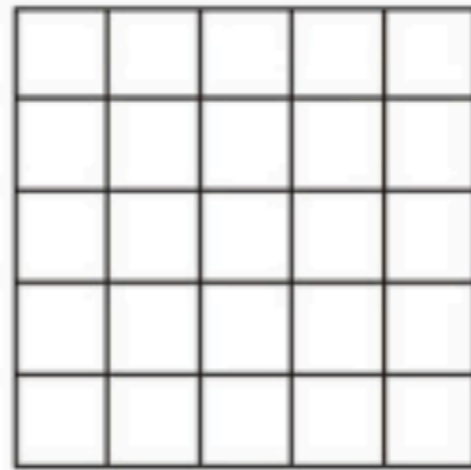
スカラーを3次元（以上）に並べたものでスカラー、ベクトル、行列を含む



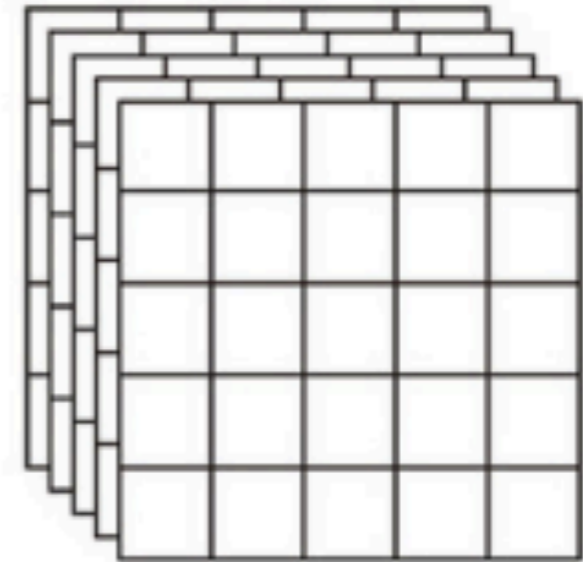
スカラー



ベクトル



行列



3階のテンソル

ベクトルを1階のテンソル、行列を2階のテンソル、以降、3階～4階～のテンソルと呼ぶ

## 1 階のテンソルから 2 階のテンソルの作成

```
b = np.array([1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,  
             16,17,18,19,20,21,22,23,24])  
  
b = b.reshape(4, 6)  
print(b)
```

1階のテンソル(ベクトル)

2階のテンソル(行列)

```
[[ 1  2  3  4  5  6]  
 [ 7  8  9 10 11 12]  
 [13 14 15 16 17 18]  
 [19 20 21 22 23 24]]
```

reshapeメソッドで24個の要素を持つ1階のテンソルを、  
(4、6)の要素を持つ2階のテンソル(4 x 6の行列)に変換

## 2階のテンソルから3階のテンソルの作成

```
b = b.reshape(2, 3, 4)
print(b)
```

```
[[[ 1  2  3  4]
   [ 5  6  7  8]
   [ 9 10 11 12]]

 [[13 14 15 16]
  [17 18 19 20]
  [21 22 23 24]]]
```

reshapeメソッドで（4、6）の要素を持つ2階のテンソルを（2、3、4）の要素を持つ3階のテンソル（2つの3 x 4の行列）に変換  
要素数は24で変わらない

## 3階のテンソルから4階のテンソルの作成

```
b = b.reshape(2, 2, 3, 2)
print(b)
```

---

```
[[[ [ 1  2]
     [ 3  4]
     [ 5  6]]
```

```
[[ [ 7  8]
   [ 9 10]
   [11 12]]]
```

```
[[[13 14]
   [15 16]
   [17 18]]
```

```
[[19 20]
 [21 22]
 [23 24]]]
```

4階のテンソルは2つの（2つの3 x 4の行列）テンソル  
要素数は2 4で変わらない



numpyで行列積を求める

## 行列積

$$\begin{aligned} AB &= \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 0 \times 2 + 1 \times 2 + 2 \times 2 & 0 \times 1 + 1 \times 1 + 2 \times 1 \\ 1 \times 2 + 2 \times 2 + 3 \times 2 & 1 \times 1 + 2 \times 1 + 3 \times 1 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 6 & 3 \\ 12 & 6 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

2行3列の行列と3行2列の行列の計算

# 行列積

$$AB = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$0 \times 2 + 1 \times 2 + 2 \times 2$$

$$AB = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$0 \times 1 + 1 \times 1 + 2 \times 1$$

$$= \begin{pmatrix} 6 & 3 \\ 12 & 6 \end{pmatrix}$$

$$AB = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$1 \times 2 + 2 \times 2 + 3 \times 2$$

$$AB = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$1 \times 1 + 2 \times 1 + 3 \times 1$$

行列積をnumpy.dotメソッドで簡単に計算できます

```
import numpy as np

a = np.array([[0, 1, 2],
              [1, 2, 3]])
b = np.array([[2, 1],
              [2, 1],
              [2, 1]])

print(np.dot(a, b))
```

---

```
[[ 6  3]
 [12  6]]
```

2行3列の行列と3行2列の行列の計算

aの列数とbの行数が一致しないとnumpyはエラーを返します

```
# 中間層
def middle_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

中間層は入力データ(x)、重み(w)、バイアス(b)を受け取る  
numpyのdot関数を用い、ベクトルxと行列wの行列積を求め、バイアス  
bを足す

(x, w, bが受け取る値は後のループ文で出てきます)

(最初に出てきた変数Xとこのxは異なるものです)

(ちなみにPythonでは変数の大文字と小文字は区別されます)

numpyのdot関数を用い、入力データ(ベクトルx)と重み(行列w)の行列積を求めます

```
X = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)
Y = np.arange(-1.0, 1.0, 0.2)
w_im = np.array([[4.0, 4.0],
                  [4.0, 4.0]])
```

[X, Y] [ [4.0, 4.0]  
          [4.0, 4.0] ]

[-1.0, -1.0] [ [4.0, 4.0]  
                  [4.0, 4.0] ]

[-1.0, -1.0] [ [4.0, 4.0]  
                  [4.0, 4.0] ]

(xが受け取る値は後のループ文で出てきますが

XとYのベクトルになります)

X = [-1.0, -0.8, -0.6, -0.4, -0.2, 0, 0.2, 0.4, 0.6, 0.8]

Y = [-1.0, -0.8, -0.6, -0.4, -0.2, 0, 0.2, 0.4, 0.6, 0.8]

入力データ 2列 x 重み 2行の行列積

この順番で計算されます

aの列数とbの行数が一致しないとnumpyはエラーを返します

## # 中間層

```
def middle_layer(x, w, b):  
    u = np.dot(x, w) + b  
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

中間層は入力データ(x)、重み(w)、バイアス(b)を受け取る  
numpyのdot関数を用い、ベクトルxと行列wの行列積を求め、バイアス  
bを足す

$$u = [X, Y] \begin{bmatrix} [4.0, 4.0] \\ [4.0, 4.0] \end{bmatrix} + b$$

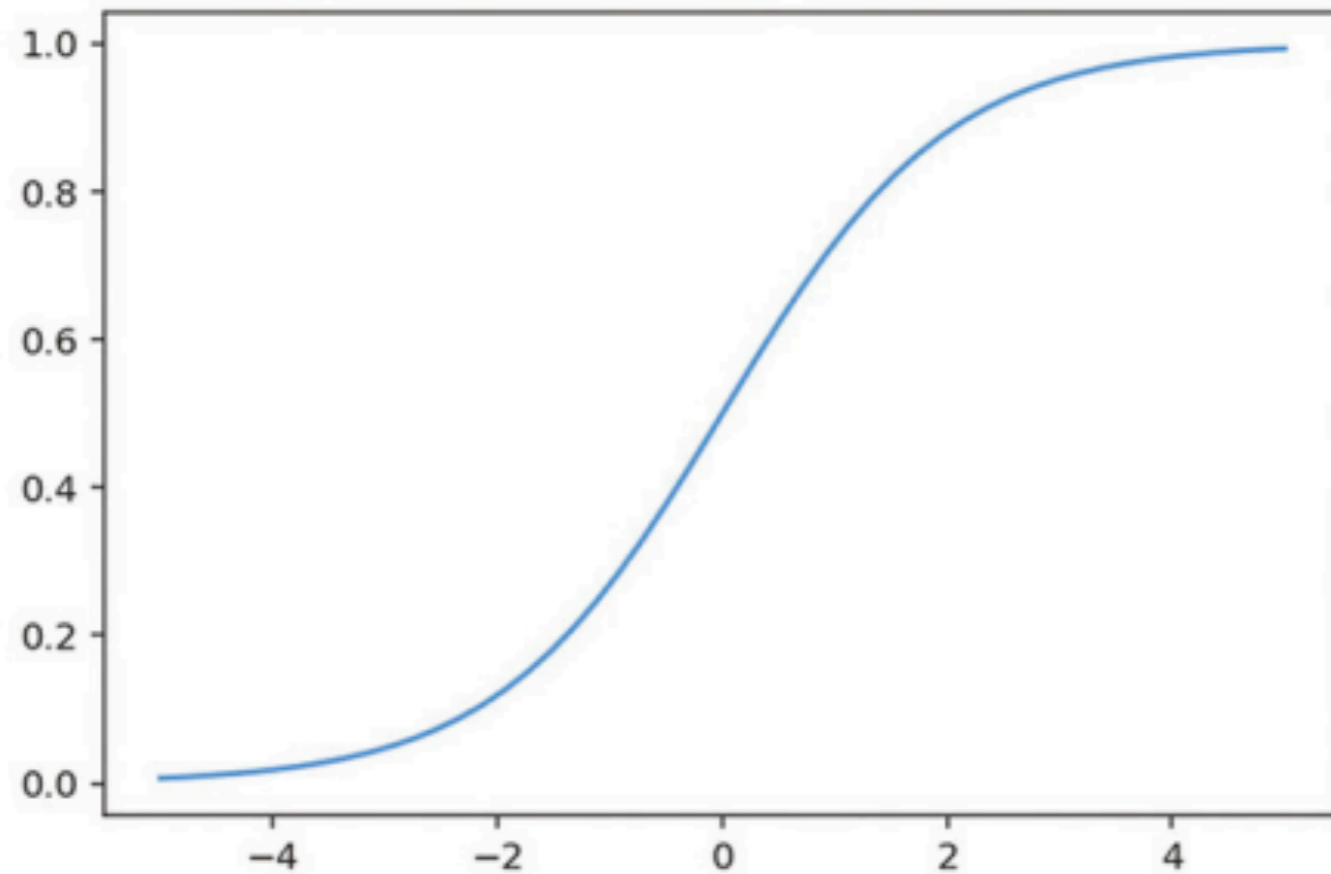
得られた結果uを活性化関数のシグモイド関数に入れて計算

```
return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

# 活性化関数で使用する シグモイド関数



# シグモイド関数



$$\frac{1}{1+\exp(-u)}$$

expはネイピア数の累乗

$$\frac{1}{1+e^{**}(-u)}$$

expはネイピア数の累乗  
なのでこの様な書き方もできます

関数への入力uが小さくなると出力yは0に近づき  
関数への入力uが大きくなると出力yは1に近づく

```
return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

$$\text{中間層の出力} = \frac{1}{1 + \exp(-(u = xw + b))}$$

### 活性化関数について

活性化関数というのは各層での（データ×重み+バイアス）のあとに適用する非線形の関数。

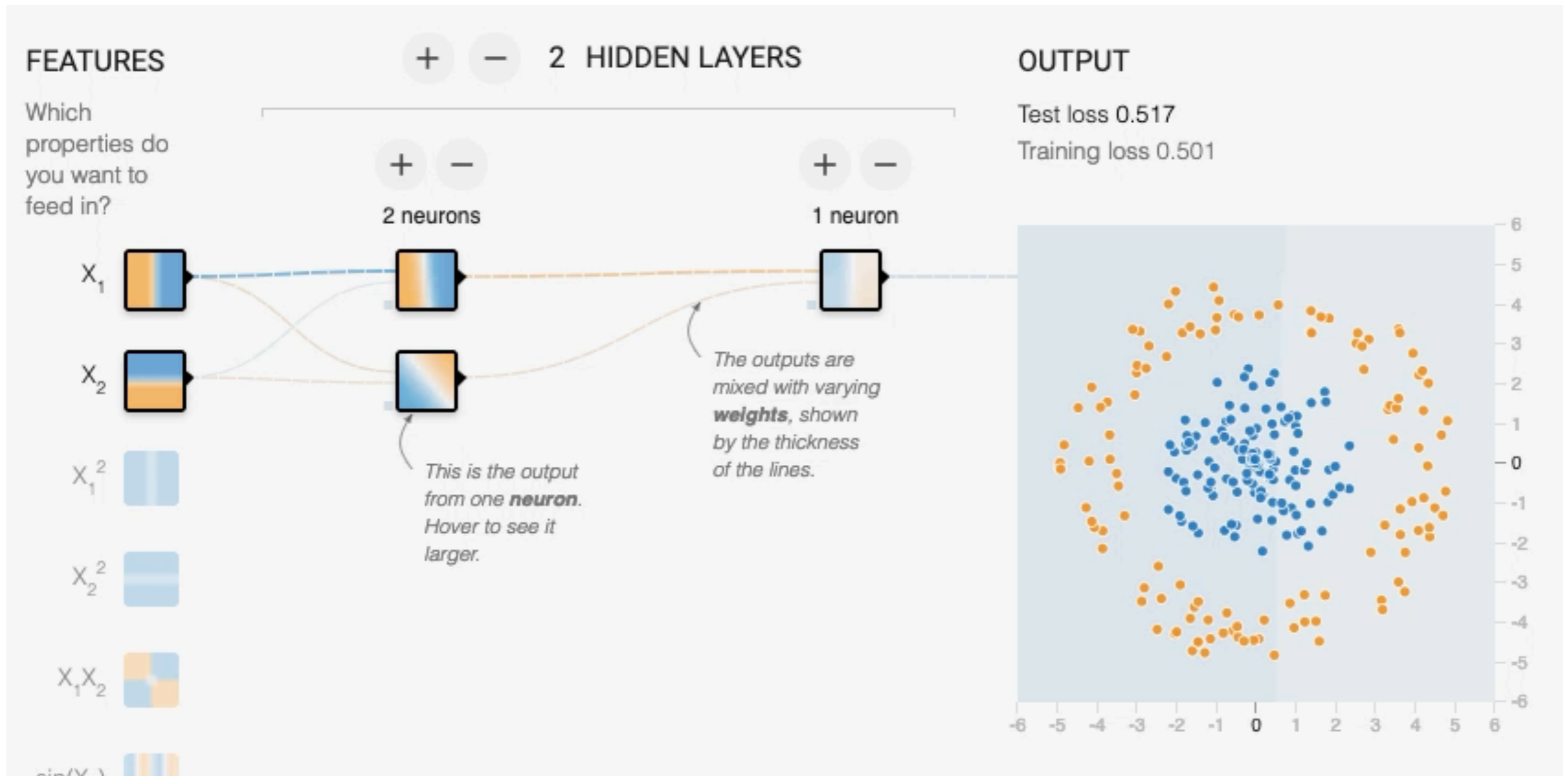
これは線形分離できないデータを線形分離できるようにする働きをする。

線形な関数を使うと層を重ねても結局線形のみで、そのまま伸縮するだけなので目的を果たさない。

バックプロパゲーション(誤差逆伝播法)するために微分できる必要がある。

\*バックプロパゲーションは次回以降に解説

# 動画で確認してみましょう



\*今回の出力結果とは関連がないものであくまでも活性化関数の解説のためです。

出力層

```
def output_layer(x, w, b):  
    u = np.dot(x, w) + b      #恒等関数  
    return u
```

出力層の活性化関数は恒等関数（値をそのまま出力）のため  
numpyのdotメソッドで計算された計算結果をそのまま出力

（x, w, bが受け取る値は後のループ文で出てきます）

（最初に出てきた変数Xとこのxは異なるものです）

（ちなみにPythonでは変数の大文字と小文字は区別されます）

## 出力層の重みとバイアス

```
w_mo = np.array([[1.0],  
                 [-1.0]]) # 出力層 2x1の行列
```

```
b_mo = np.array([0.1]) # 出力層
```

```
def output_layer(x, w, b):  
    u = np.dot(x, w) + b #恒等関数  
    return u
```

$$u = [X, Y] \begin{bmatrix} [1.0,] \\ [-1.0] \end{bmatrix} + 0.1$$

得られた結果uを恒等関数でそのまま出力

(x, w, bが受け取る値は後のループ文で出てきます)

# ニューラルネットワークの演算

```

# グリッドの各マスでニューラルネットワークの演算
for i in range(10):
    for j in range(10):

        # 順伝播
        inp = np.array([X[i], Y[j]]) # 入力層
        mid = middle_layer(inp, w_im, b_im) # 中間層
        out = output_layer(mid, w_mo, b_mo) # 出力層

        # グリッドにNNの出力を格納
        Z[j][i] = out[0]

```

ループ文（多重ループのfor文）でデータ要素数分（10回） $x[i]$ と $y[j]$ について計算をする  
 $inp$ （入力層の結果）の結果は $mid$ （中間層）に渡されて $x$ 重み+バイアスにて計算  
 出力結果 $mid$ （中間層の結果）は $out$ （出力層）に渡されて $x$ 重み+バイアスにて計算  
 グリッドに出力の格納  
 $out[0]$ は出力層の要素数が1つのため



```
for i in range(10):  
    for j in range(10):
```

ループ文（多重ループのfor文）でiとjが（10になるまで）10回計算

```
inp = np.array([X[i], Y[j]]) # 入力層
```

XとYそれぞれ i, j 回分の配列を中間層へ渡す（10回）

X = [-1.0, -0.8, -0.6, -0.4, -0.2, 0, 0.2, 0.4, 0.6, 0.8]

Y = [-1.0, -0.8, -0.6, -0.4, -0.2, 0, 0.2, 0.4, 0.6, 0.8]

```
mid = middle_layer(inp, w_im, b_im) # 中間層
```

入力層からの結果を $x=inp$ ,  $w=w\_im$ ,  $b=b\_im$ として計算

```
# 中間層
def middle_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

```
out = output_layer(mid, w_mo, b_mo) # 出力層
```

中間層からの結果を $x=mid$ ,  $w=w\_mo$ ,  $b=b\_mo$ として計算

```
# 出力層
def output_layer(x, w, b):
    u = np.dot(x, w) + b
    return u # 恒等関数
```

## # 中間層

```
def middle_layer(x, w, b):  
    u = np.dot(x, w) + b  
    return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

中間層は入力データ(x)、重み(w)、バイアス(b)を受け取る  
numpyのdot関数を用い、ベクトルxと行列wの行列積を求め、バイアス  
bを足す

$$u = [X, Y] \begin{bmatrix} [4.0, 4.0] \\ [4.0, 4.0] \end{bmatrix} + b$$

得られた結果uを活性化関数のシグモイド関数に入れて計算

```
return 1/(1+np.exp(-u)) # シグモイド関数
```

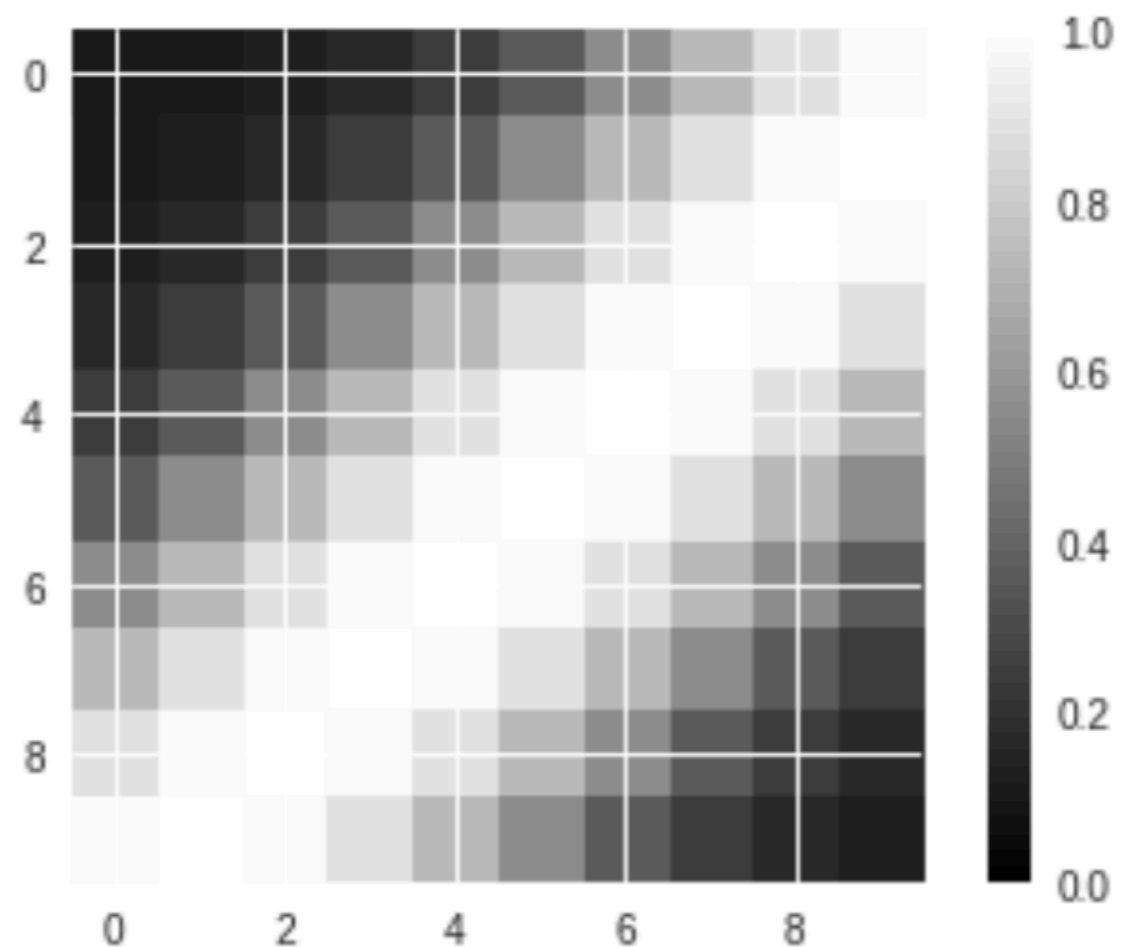
グリッドの表示

## # グリッドの表示

```
plt.imshow(Z, "gray", vmin = 0.0, vmax = 1.0)  
plt.colorbar()  
plt.show()
```

matplotlib

のpyplot関数でグリッドに表  
示



```
plt.imshow(Z, "gray", vmin = 0.0, vmax = 1.0)
```

pyplotのimshow関数は、配列を画像として表示

Z 表示するグリッドデータ

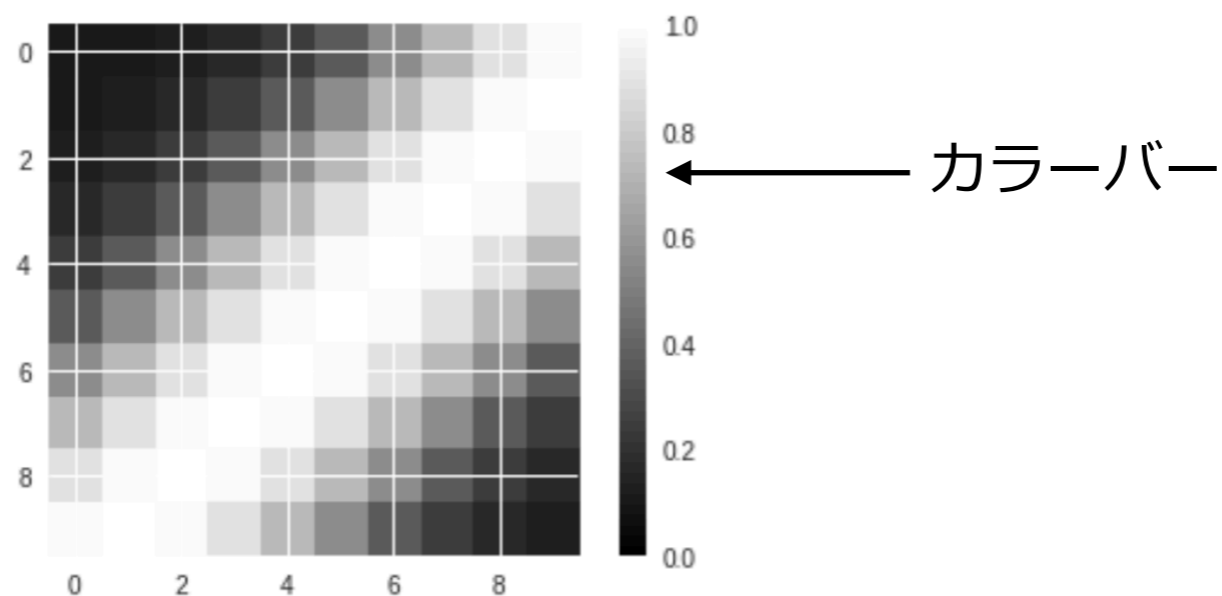
gray 表示するカラー 今回はグレースケールを選択

vmin 表示するグラフの値の最小値

vmax 表示するグラフの値の最大値

```
plt.colorbar()
```

カラーバーの表示

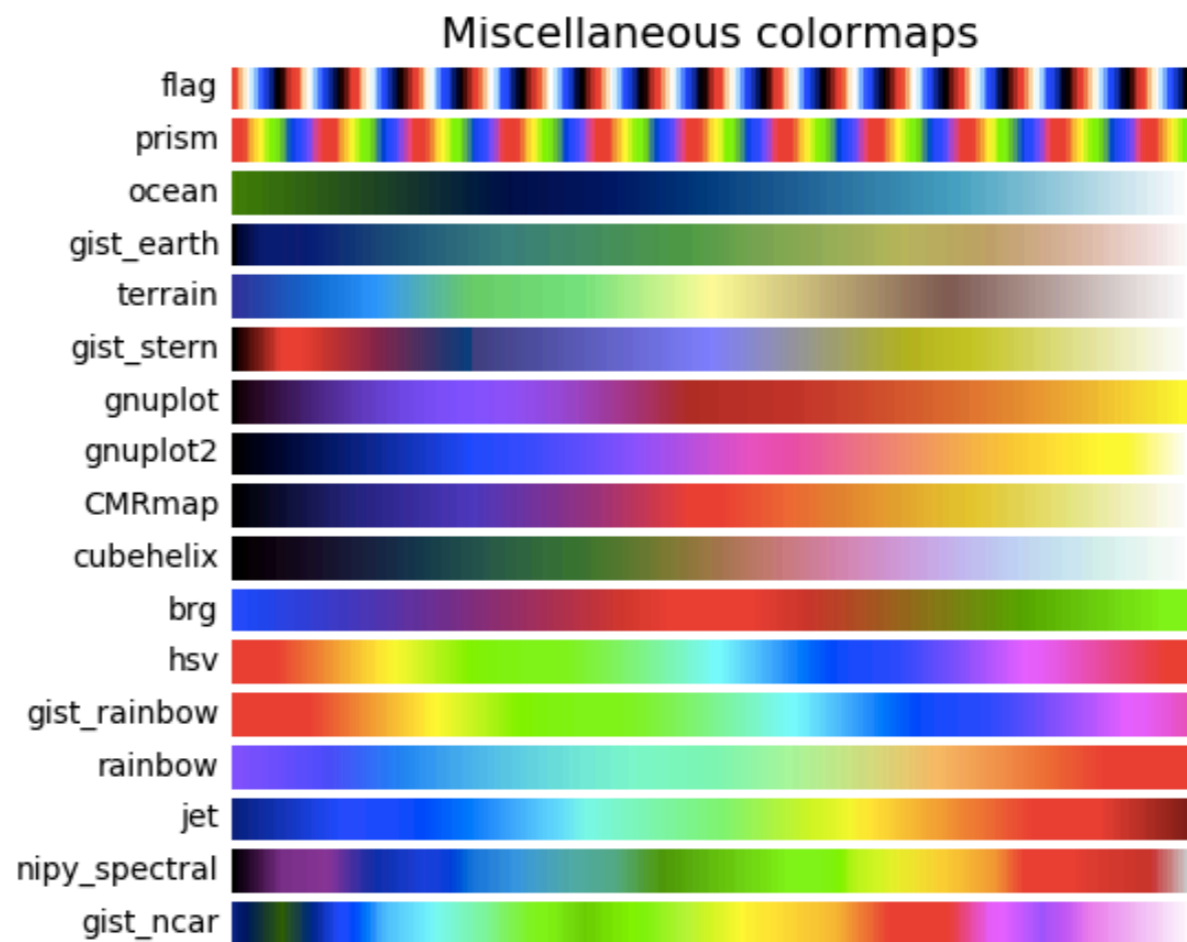
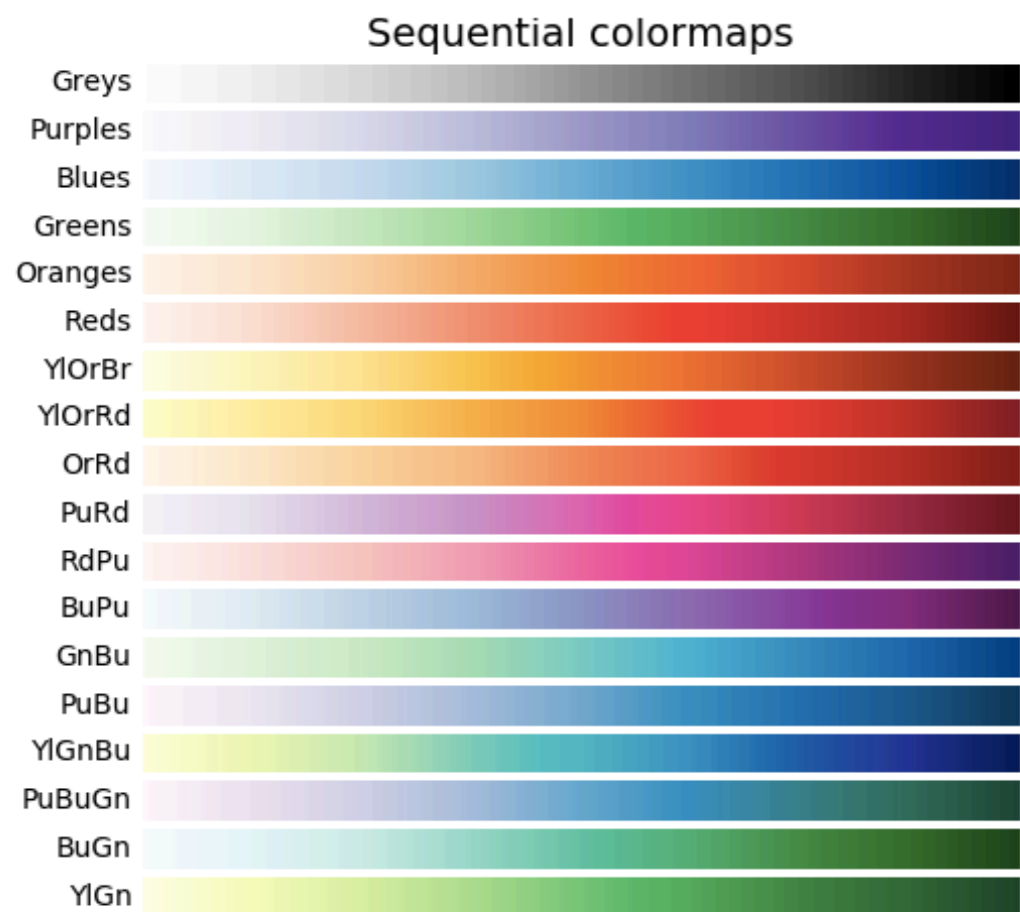


```
plt.imshow(Z, "gray", vmin = 0.0, vmax = 1.0)
```

plt.imshow(Z, cmap="gray") cmapを省略しているコード

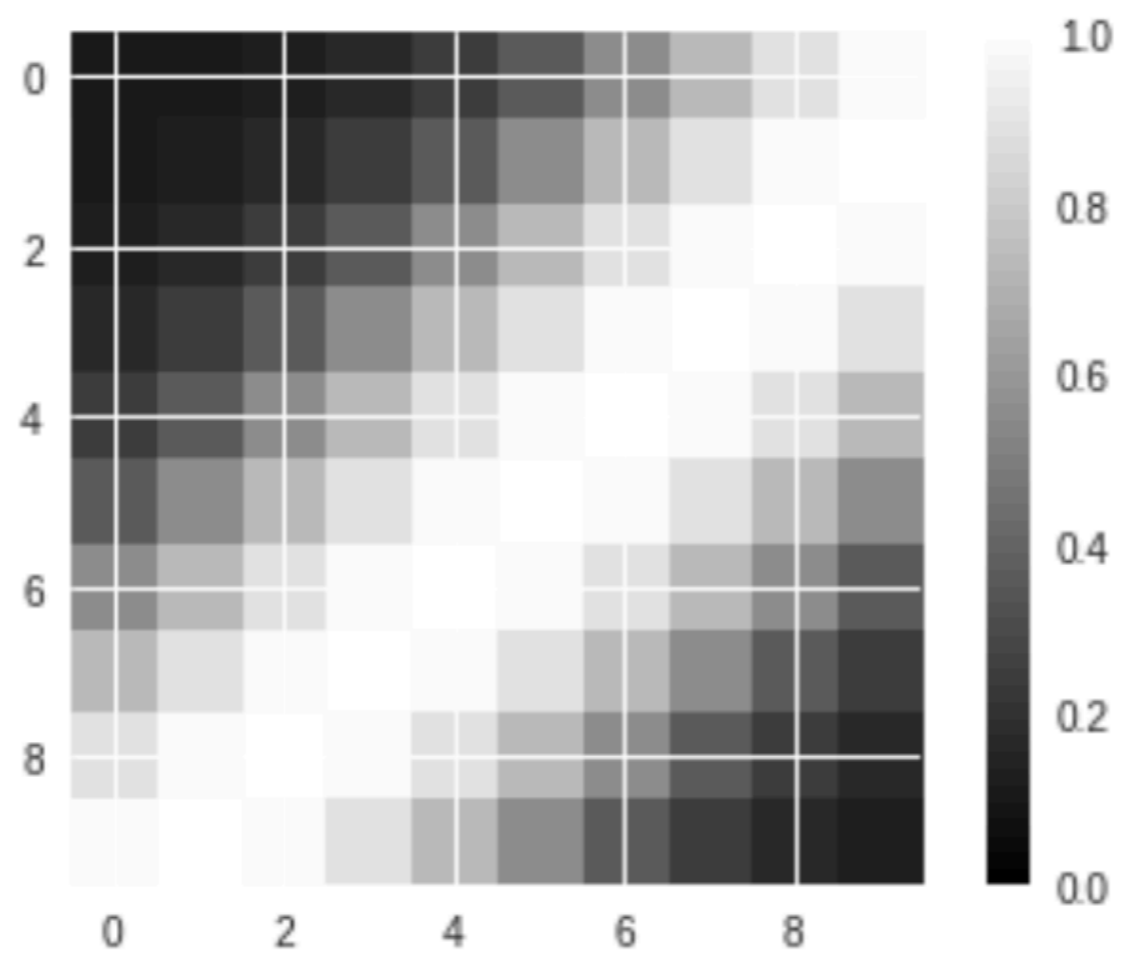
公式サイトにカラーマップがあります

[https://matplotlib.org/examples/color/colormaps\\_reference.html](https://matplotlib.org/examples/color/colormaps_reference.html)



```
plt.show()
```

グリッドの表示





ディープラーニングのプログラミング基礎

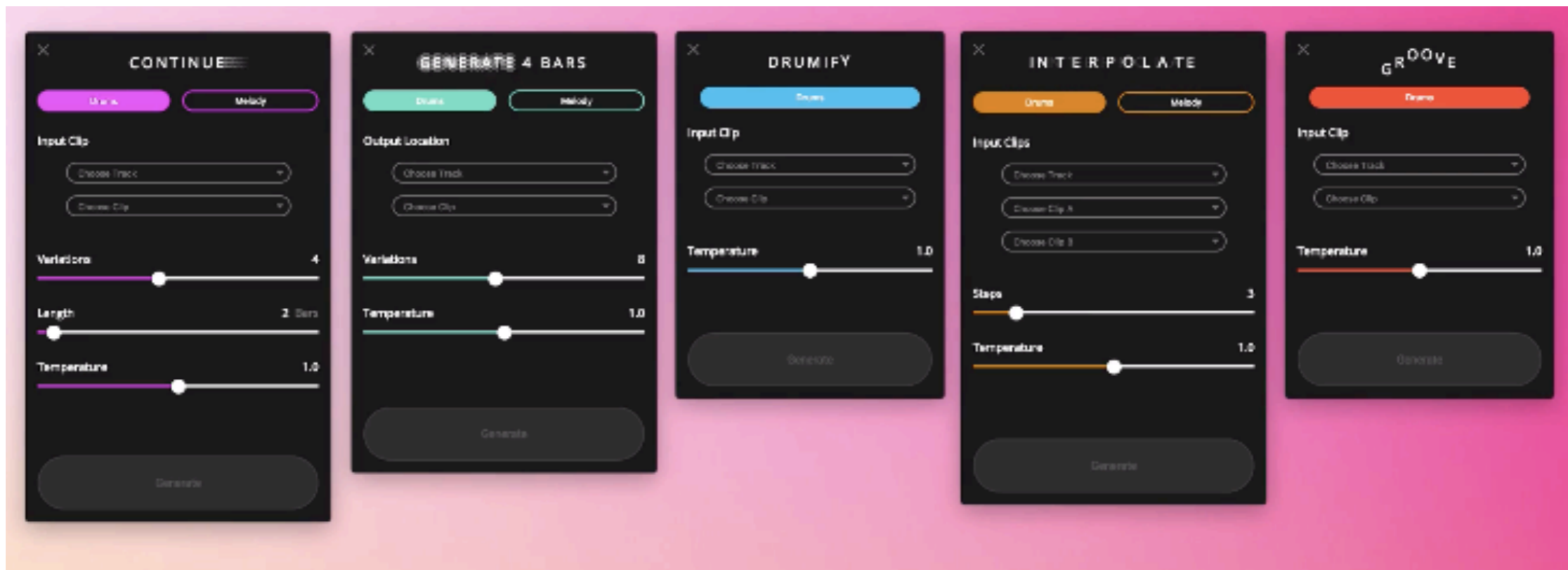
Magentaの実践的解説

Tensorflowの基礎

Magenta Studio  
がv0.1で正式リリース

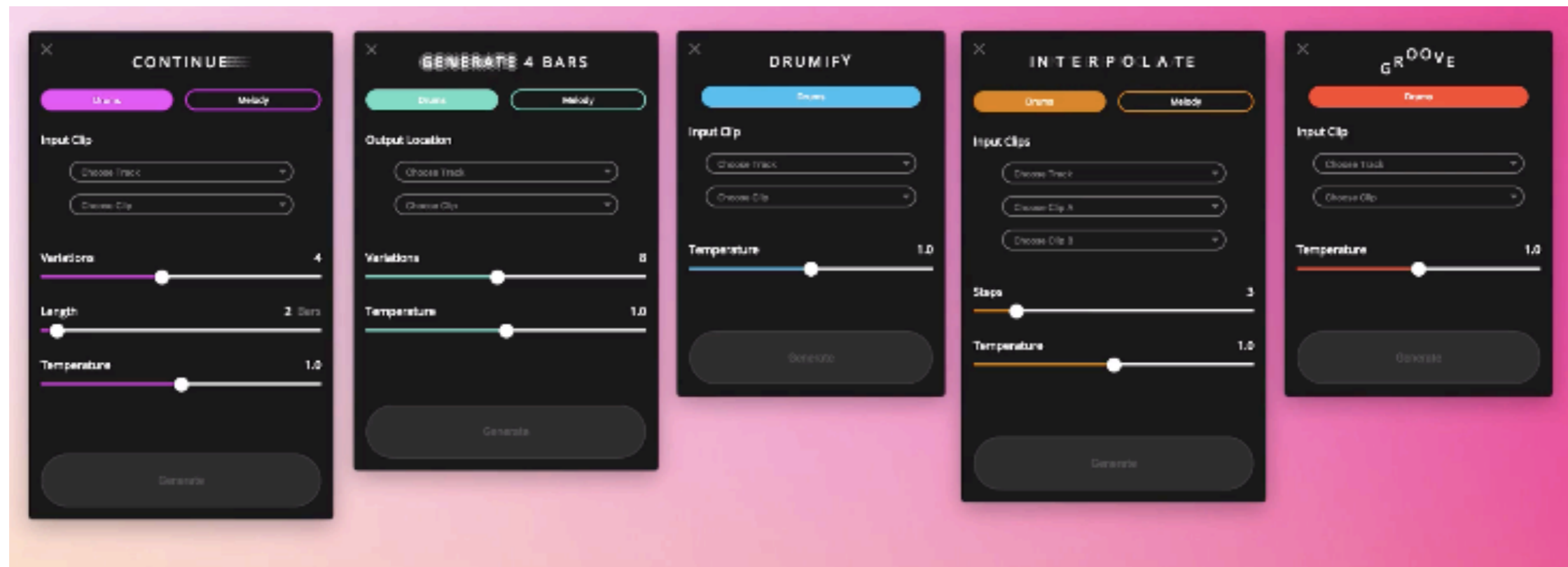
# Magenta Studio

機械学習を使ったオープンソースの音楽プラグインのコレクション  
スタンドアローン版とAbleton Live版がある  
スタンドアローンのWINDOWS版は近日登場予定



スタンドアローン版とAbleton Live版は基本的に同じ機能  
違いはMIDIの読み込みと書き出し方法

# Magenta Studio



CONTINUE, INTERPOLATE, GROOVAE, GENERATE 4 BARS,  
Drumifyの5種類のプラグイン

# Magenta Studioとは

機械学習を使ったオープンソースの音楽プラグインのコレクションMagenta.js（MagentaのJavascript版）をコードを書く必要やブラウザ、node.jsの利用を必要とせず直接使用できる。コマンドラインやウェブブラウザを介さずとも、多くの音楽家に実際のDAW音楽制作環境でMagenta使用を広めるため今後取り組みが強化される模様

ソースコードが公開されているために、独自の学習データを使用する事なども可能

アプリの制作はElectronを使用しているので自身でのMagentaデスクトップアプリの開発も可能

Ableton Liveでの使用のためにMAX for Liveを使用し、Node for MAXでMagentaとをつなぐ

# Ableton LIVEとは



Ableton社製のDAW（音楽制作）ソフト

クリップスロットにMIDIファイルやオーディオファイルを読み込ませ、組み合わせることによって楽曲を制作する。

標準搭載される多数のシンセやプラグインのほか、外部ソフトとの同期や、MAXやMAX for Liveを使用したMagentaとの連携など最新の音楽制作環境を提供する

# Ableton LIVEとは

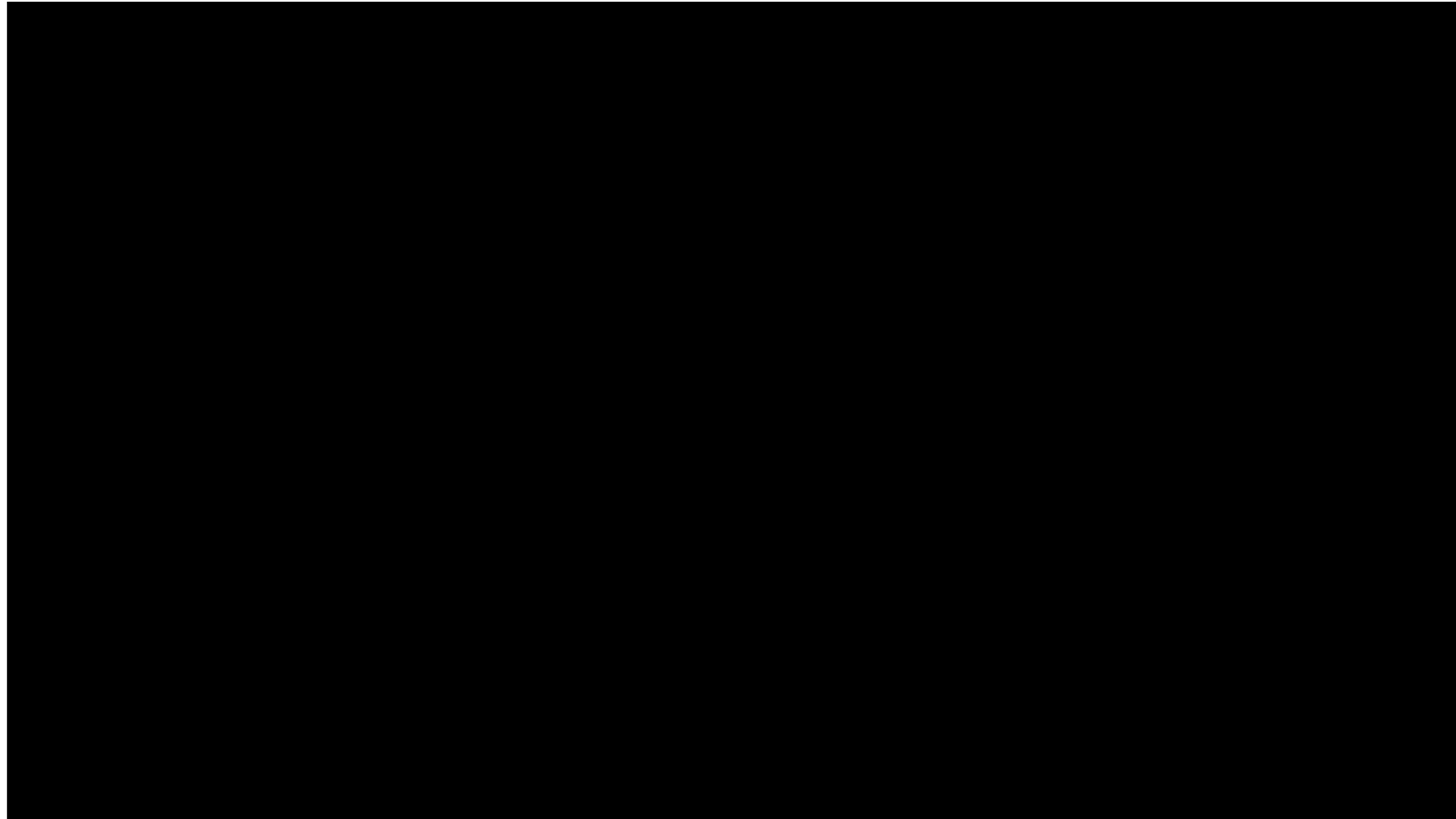


Ableton社製のDAW（音楽制作）ソフト（最新版は10）

クリップスロットにMIDIファイルやオーディオファイルを読み込ませ、組み合わせることによって楽曲を制作する。

標準搭載される多数のシンセやプラグインのほか、外部ソフトとの同期や、MAXやMAX for Liveを使用したMagentaとの連携など最新の音楽制作環境を提供する

# MAXとは



Cyclong74社製のオーディオビジュアルプログラミングソフト（最新版は8）  
パッチングにより、オーディオ、エフェクト、アート、3D、プロジェクション・マッピング  
をビジュアルプログラミング可能。  
node.js使用でMagentaとの連携、開発も行える



# Electronとは



JavaScript, HTML, CSS といったWeb技術を利用してネイティブアプリケーションを作成するためのフレームワーク

Webサイトを作成する感覚でデスクトップアプリを開発できる

<https://electronjs.org/>

# Magenta Studio v0.1 の各解説

# Magenta Studio

## 5種に共通の使用法

- ・ファイル読み込み

MIDIファイルを読み込みGENERATEボタンで生成

- ・ファイルの出力先

標準ではインプットフォルダーと同じフォルダー  
任意で指定し変更できる

- ・TEMPERATURE

ニューラルネットワークの生成バリエーションの度合い  
をコントロール

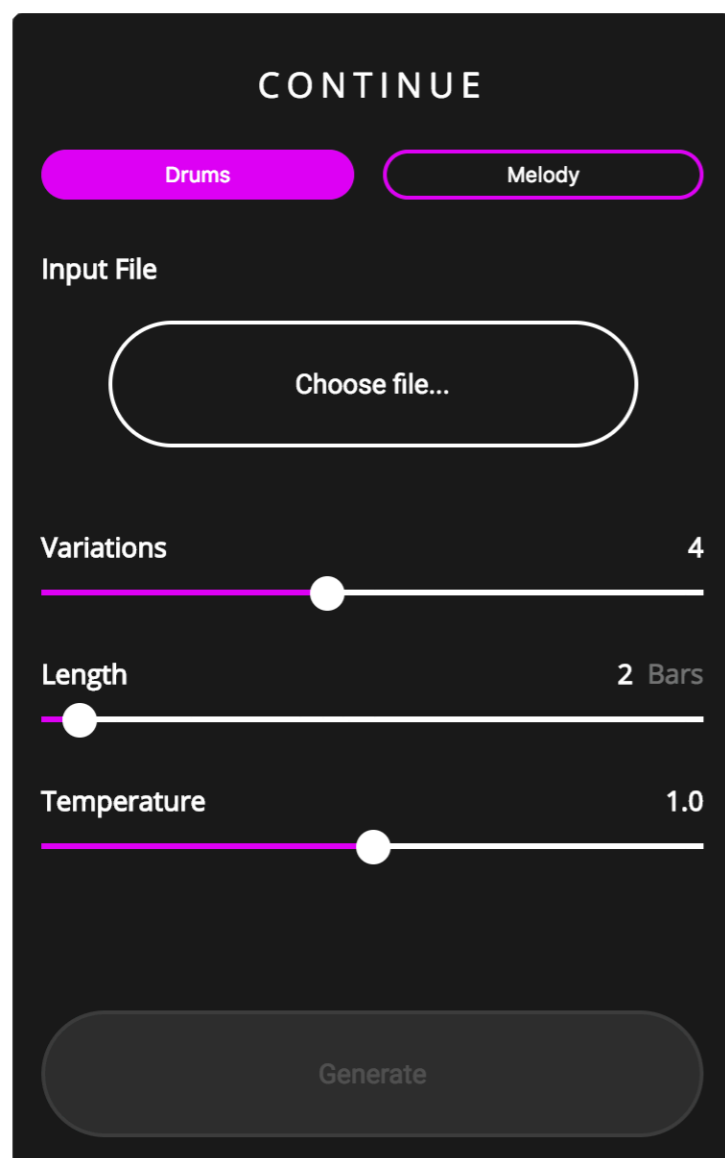
高いほど変化させた複雑なバリエーション（時に混沌と  
するほど） 低いほど元の学習データに近い生成を行う

- ・メロディーは単音のみ対応
- ・ドラムはGM MIDI配列の9音のみ

## 対応ドラム音表

Instrument	Pitch
Bass drum/Snare drum	36/38
Closed/Open hi-hat	42/46
Low/Mid/High tom	45/48/50
Crash/Ride cymbal	49/51

# Magenta Studio



## CONTINUE

RNN(recurrent neural network)を使用し、入力したMIDIファイル（ドラムもしくはメロディー）に追従する新たなバリエーションを生成する

# CONTINUE

Drums | Melody

Input Clip

Choose Track

Choose Clip

Variations 4

Length 2 Bars

Temperature 1.0

Generate

Continue [Continue]

Link Ext Tap 120.00 4 / 4 1 Bar 107 . 3 . 3

1 Grand Piano P

Drop Files and Devices Here

Master

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

-7.66

1 S

Clip Notes

D3-D4 Start 1 1 1

:2 \*2 End 2 1 1

Rev Inv Legato Dupl.Region Loop

Pgm Change Position 1 1 1

Bank --- Sub --- Length 1 0 0

Pgm ---

1 1.1.3 1.2 1.2.3 1.3 1.3.3 1.4 1.4.3

D3 E3 F3 G3 A3 B3 C4 C4 D4 A3 F3 E3

127 1

1/16

1-Grand Piano Piano Harp Time mag

# Magenta Studio

The screenshot shows the 'GENERATE 4 BARS' interface. At the top, there are two buttons: 'Drums' (highlighted in green) and 'Melody'. Below these is the 'Output Location' section with a 'Choose folder...' button. Further down are two sliders: 'Variations' set to 8 and 'Temperature' set to 1.0. At the bottom is a large 'Generate' button.

## GENERATE

MIDIファイルの必要なく、新たな4小節のパターンを生成

ドラムもしくはメロディー4小節  
数百万曲の学習データを元に行っている  
とされる

GENERATE 4 BARS

Drums Melody

Output Location

1-Grand Piano

1/4 GENERATE

Variations 4

Temperature 1.0

Output 4 clips to Clip Slots 1-4

Generate

Generate [Generate]

Link Ext Tap 120.00 4 / 4 1 Bar

10. 1. 2

1 Grand Piano 2 Datai Kit

Drop Files and Devices Here

Master

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

-11.1 -Inf

0 12 24 36 48 60

0 12 24 36 48 60

1 2

S S

Solo

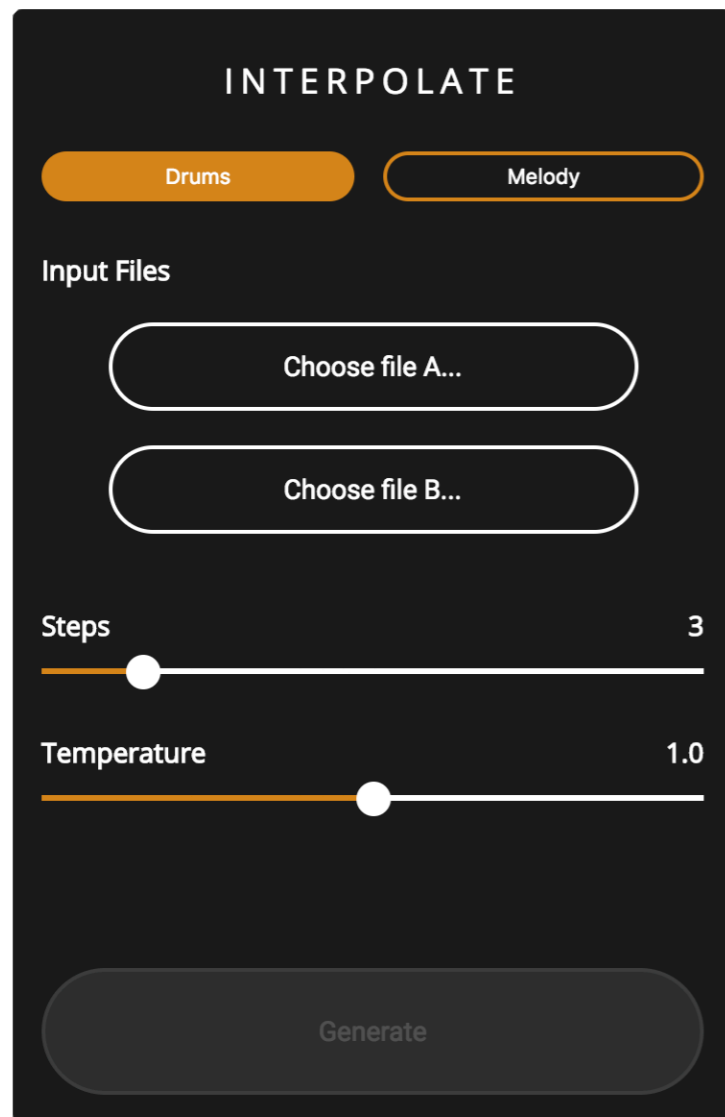
-11.1

0 12 24 36 48 60

No clip selected.

1-Grand Piano mag

# Magenta Studio



## INTERPOLATE

VAE(Variational Auto Encoder)を使用し、2つのMIDIファイル（ドラムもしくはメロディー）を融合したバリエーションを生成

ファイルは4小節以下のみ



# INTERPOLATE

Drums Melody

Input Clips

- 1-Battu Kit
- Funky Beat 1
- Funky Beat 2

Steps 3

Temperature 1.0

Output 3 clips to Clip Slots 3-5

Generate

Interpolate [Interpolate]

Link Ext Tap 120.00 4 / 4 1 Bar 7. 1. 4

1 Battu Kit

- Funky Beat 1
- Funky Beat 2

Drop Files and Devices Here

Master

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12

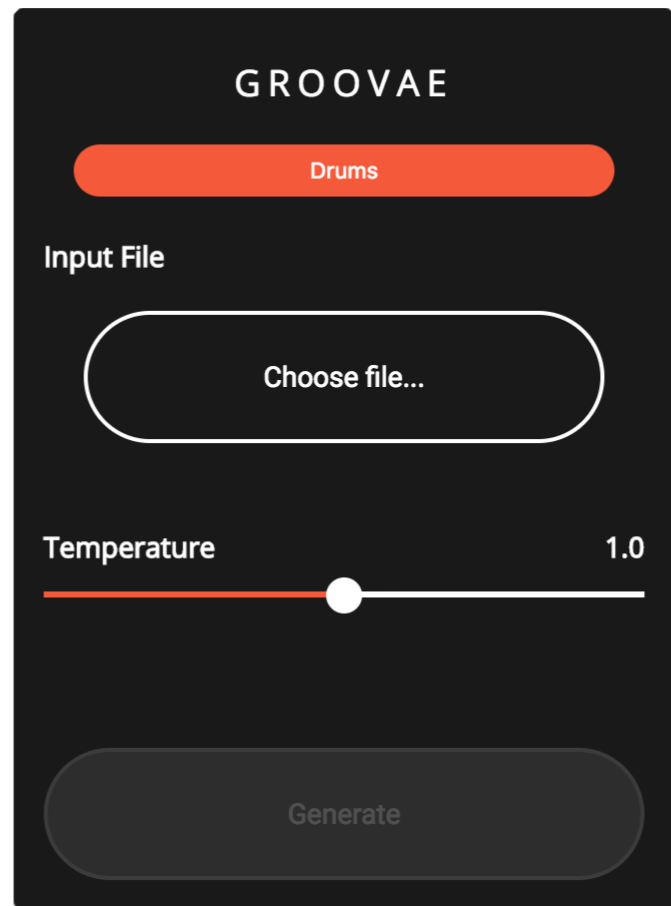
Drop Audio Effects Here

magenta

- CONTINUE
- INTERPOLATE
- GENERATE
- GROOVAE

1-Battu Kit magenta

# Magenta Studio



## GrooVAE

入力されたドラムパターンにベロシティやタイミングの変化でノリを加える

レコーディングされた人間のドラム演奏15時間分を学習  
方法はGoogle翻訳に用いられたものに近いとされる

**GROOVAE**

Drums

Input Clip

1-Battu Kit

Funky Beat

Temperature 1.0

Output clip to Clip Slot 2

Generate

GroovAE [Generate]

Link Ext Tap 120.00 4 / 4 1 Bar 175 . 3 . 2

1 Battu Kit 2 Contemporary Bass

Funky Beat Bs1 Funk Cmaj 124bpm

Drop Files and Devices Here

-2.20 -2.65 2.36

1 2

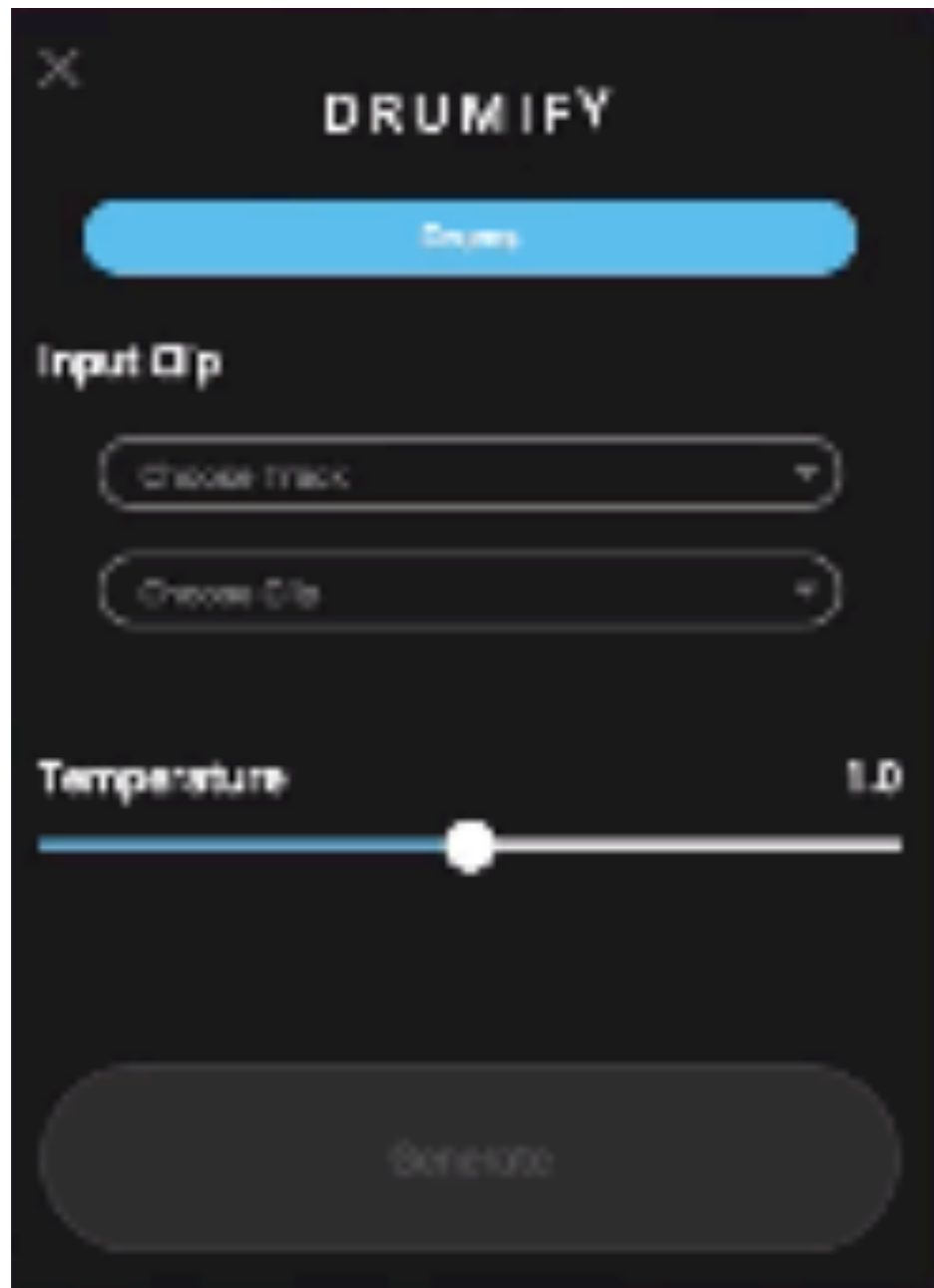
S S

1-Battu Kit mag

Master 1-12

No clip selected.

# Magenta Studio



## DRUMIFY

入力された楽器演奏のMIDIファイル（メロディーやベース、コード進行まで！）のパターンやアクセントに従い、適したドラムパターンを生成する

# DRUMIFY

Drums

Input Clip

Choose Track

Choose Clip

Temperature 1.0

Generate

## Drumify [Drumify]

Link Tap 85.00 4 / 4 1 Bar 9. 1. 4 3. 1. 1 4. 0. 0

MAGENTA	2 Electric Piano	Guitar	Bass	Drums	Bass 2	Master
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Electric Piano	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	126 bpm
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Guitar	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	89 bpm
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Bass	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	86 bpm
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Bass 2	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	5

MIDI From: All Ins | MIDI To: No Output | Monitor: In Auto Off

Audio From: Lxt. In | Audio To: Master | Monitor: In Auto Off

Gain: 1 (-Inf), 2 (-Inf), 3 (-9.36), 4 (-11.0), 5 (-11.8), 6 (-6.92)

Drop Files and Devices Here

Cue Out: 1/2 | Master Out: 1/2

Clip: Electric Piano | Notes: A#1-D4 | Signature: 4/4 | Groove: None

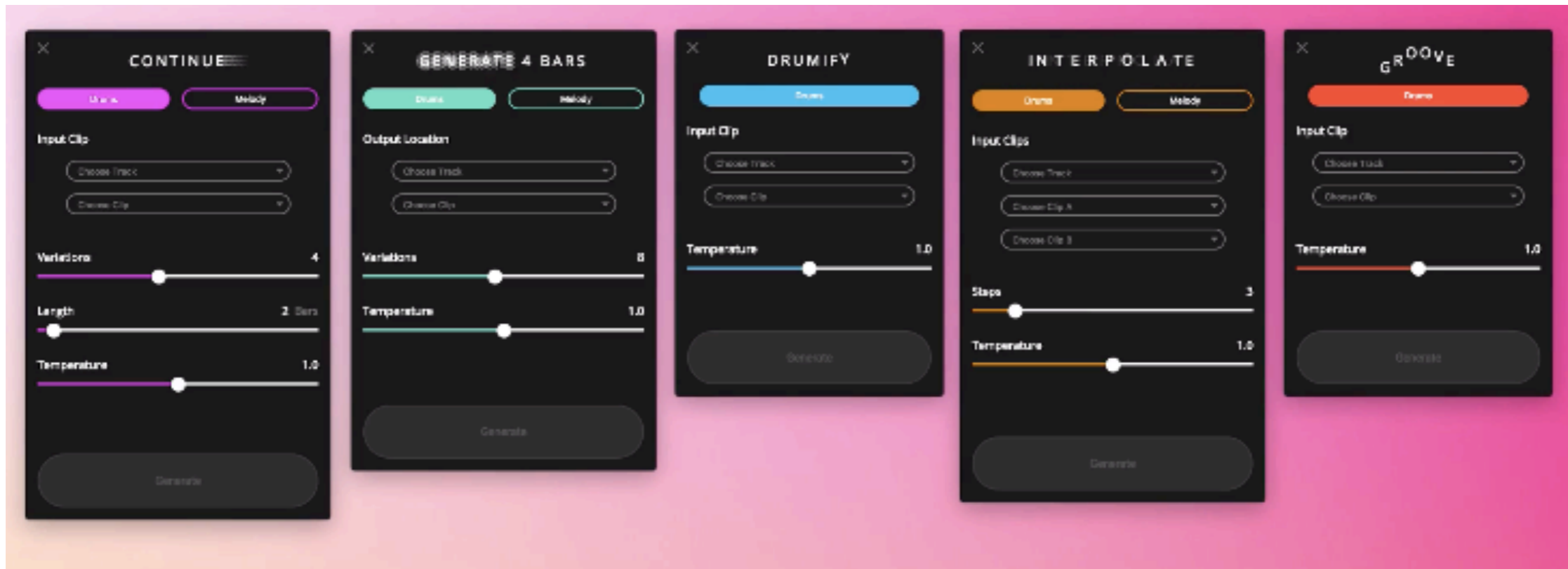
Position: 1 | Length: 4.0.0

127 | 1/16

LiveもMAXもないから使えない、、、

スタンドアローン版(MACのみ)  
もあります

# Magenta Studio スタンドアローン版



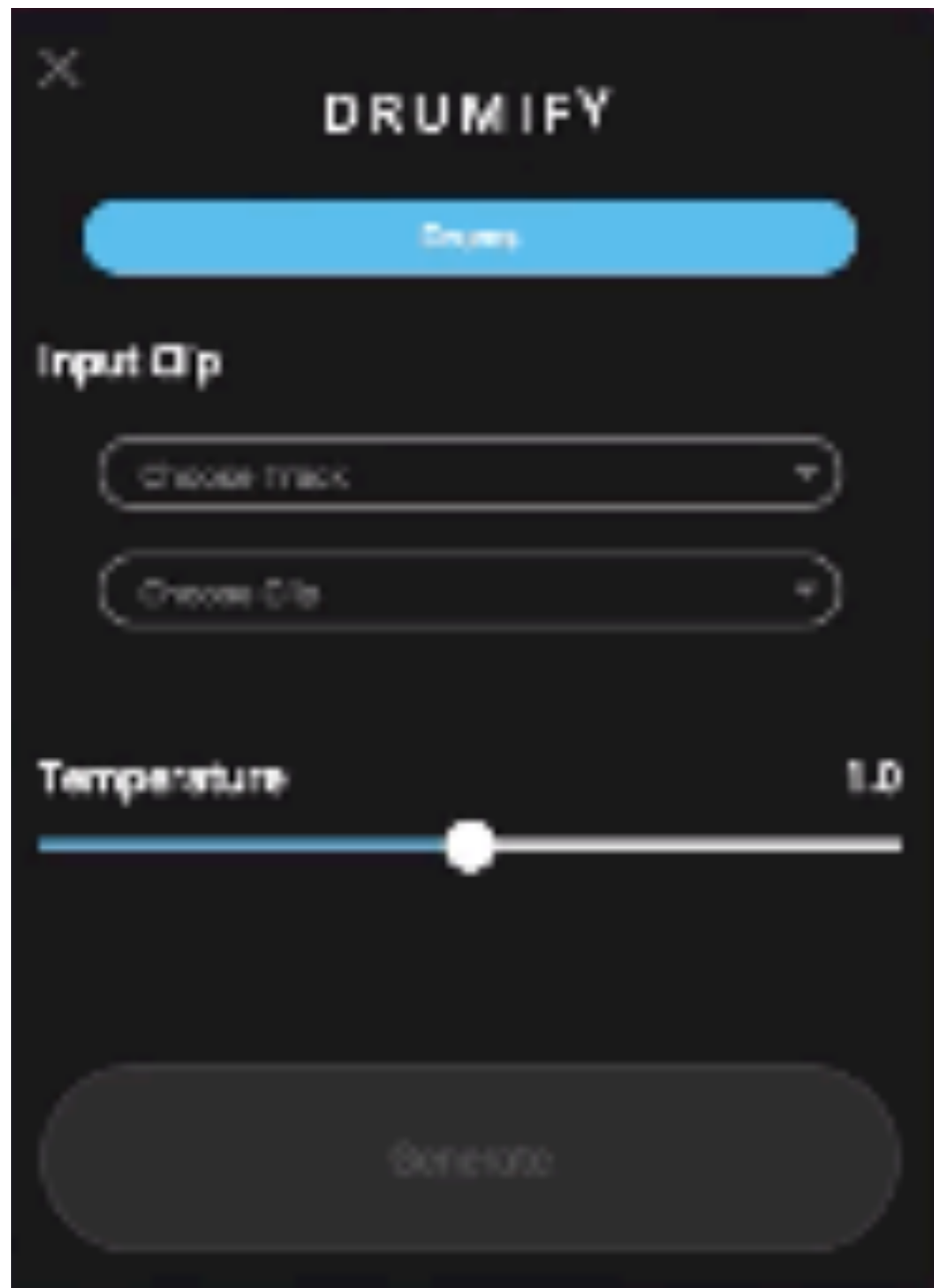
スタンドアローン版とAbleton Live版は基本的に同じ機能  
違いはMIDIのインアウト

CONTINUE, INTERPOLATE, GROOVAE, GENERATE 4 BARS,  
Drumifyの5種類のプラグイン



DRUMIFYでドラムトラックを  
作ってみましょう

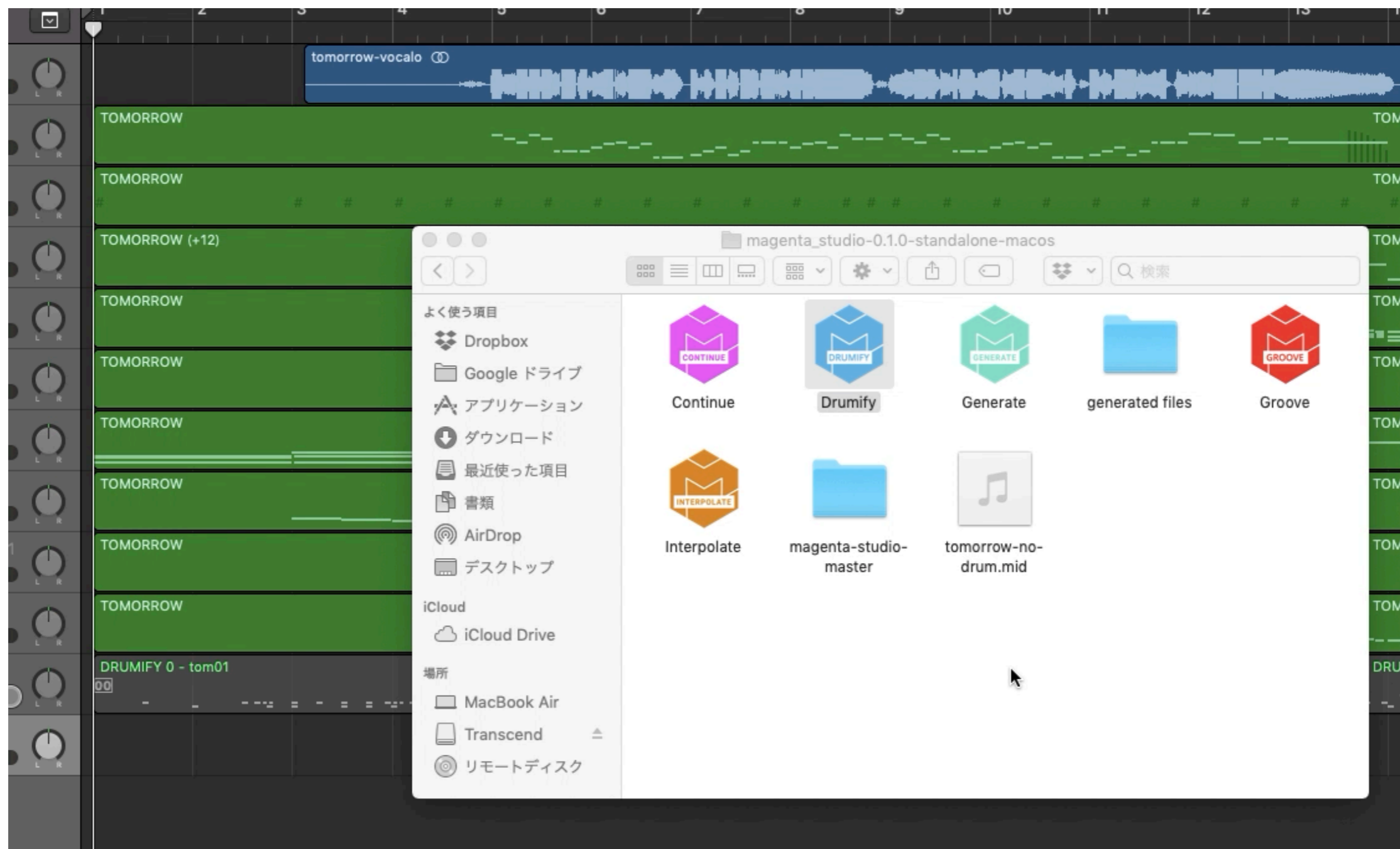
# Magenta Studio



## DRUMIFY

入力された楽器演奏のMIDIファイル（メロディーやベース、コード進行まで！）のパターンやアクセントに従い、適したドラムパターンを生成する

# Drumify スタンドアローン (動画)



Magentaでメロディーを生成して  
Drumifyでドラムトラックを作る

Magentaでメロディーを生成

Melody RNN

Attention

を使用します

# Melody RNN

でメロディー（単音）生成させます

```
python magenta/models/melody_rnn/melody_rnn_generate.py \  
--config=attention_rnn \  
--bundle_file=attention_rnn.mag \  
--output_dir=outputs/attention \  
--num_outputs=5 --num_steps=128 --primer_melody="[60]"
```

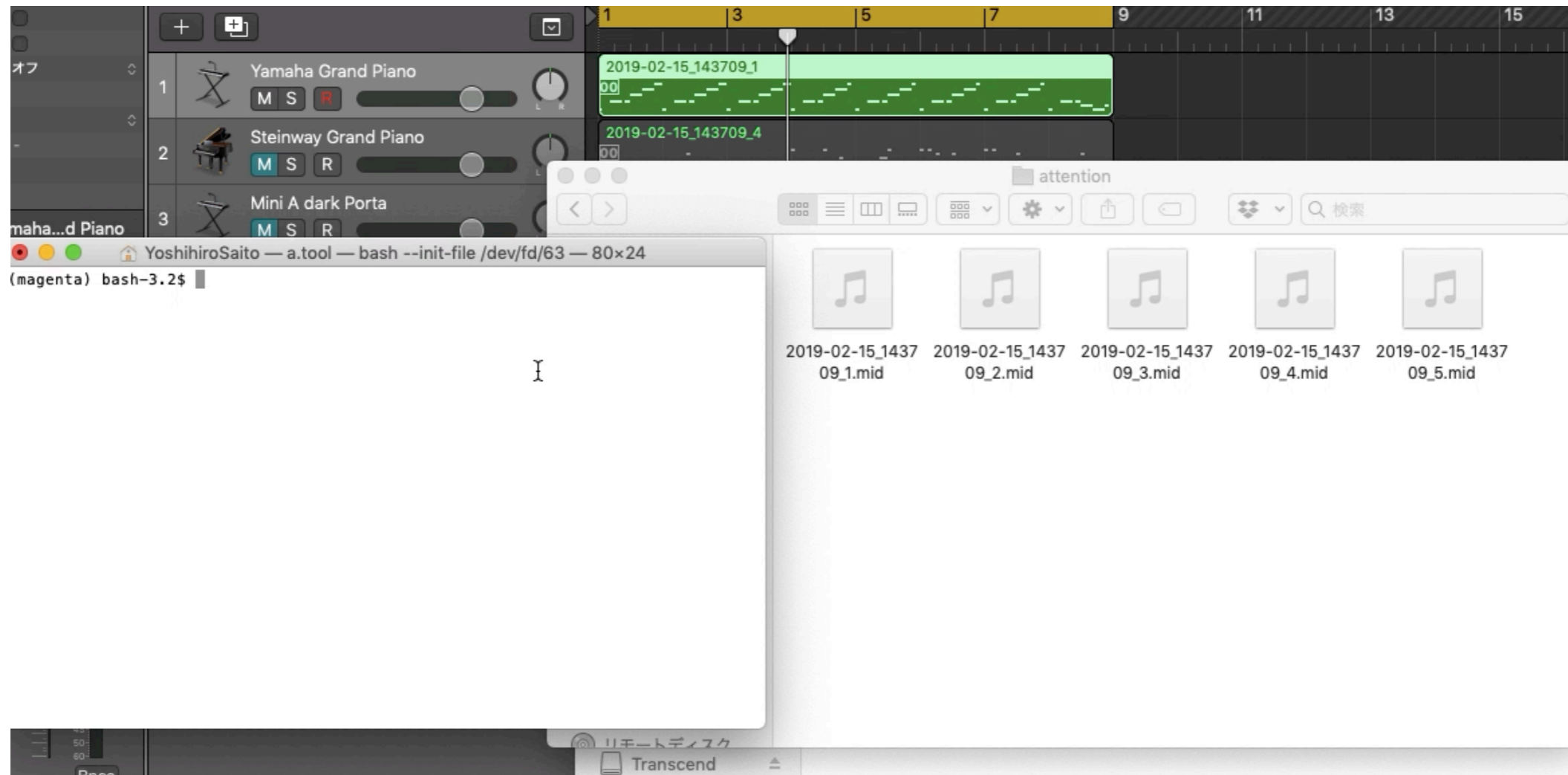
← バックスラッシュ（\）を入れる理由は  
改行できないコードを改行するためです

生成する  
MIDIファイルの数

生成する  
MIDIファイルの長さ  
1小節 = 16  
8小節 = 128

最初のガイドとなる音  
は60=C3

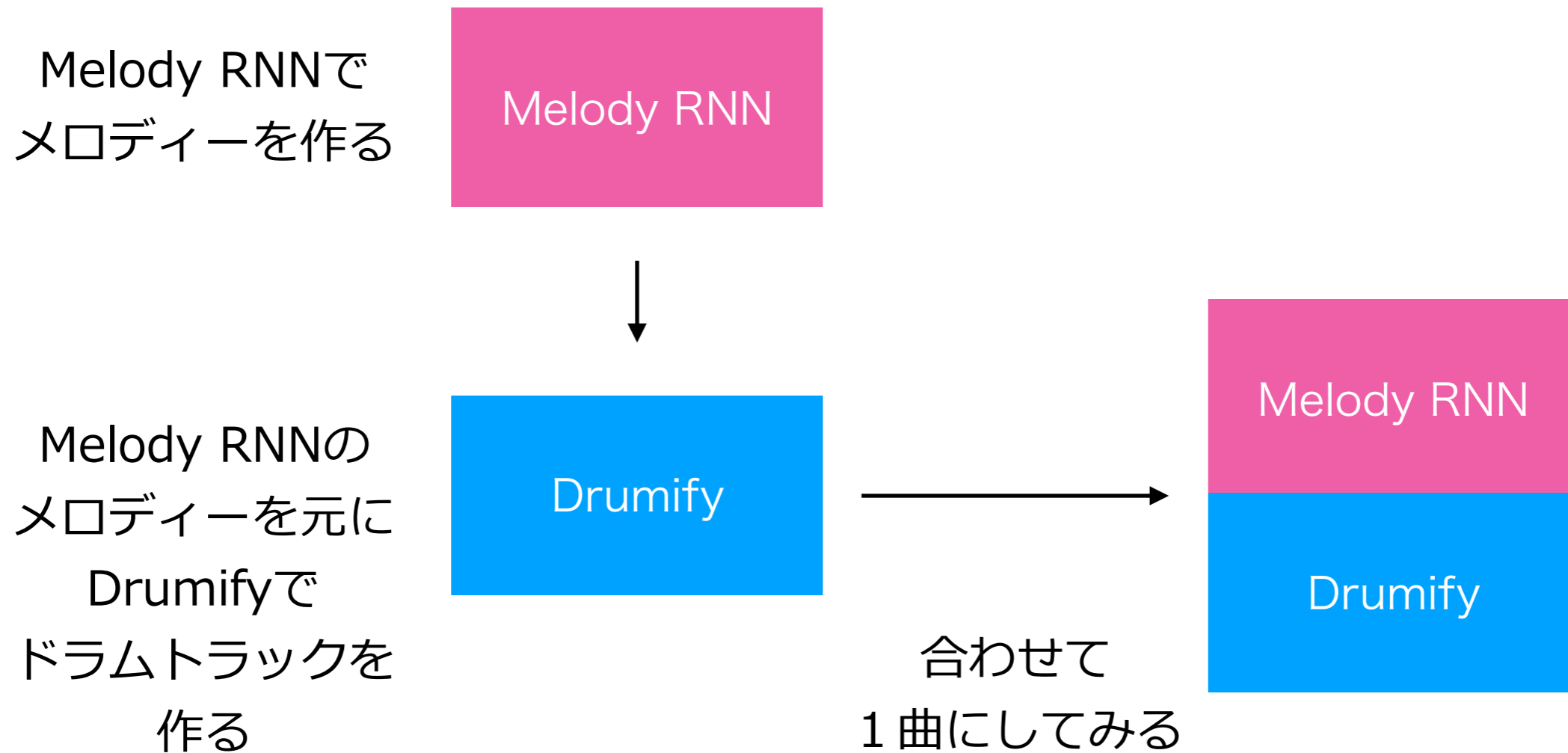
# Melody RNN メロディー（単音）生成（動画）



Melody RNNで生成したメロディーを元に  
Drumifyでドラムトラックを作る



# Melody RNNで生成したメロディーを元に Drumifyでドラムトラックを作る



Ableton Live  
で利用できる他のMagentaプラグイン

Nsynth

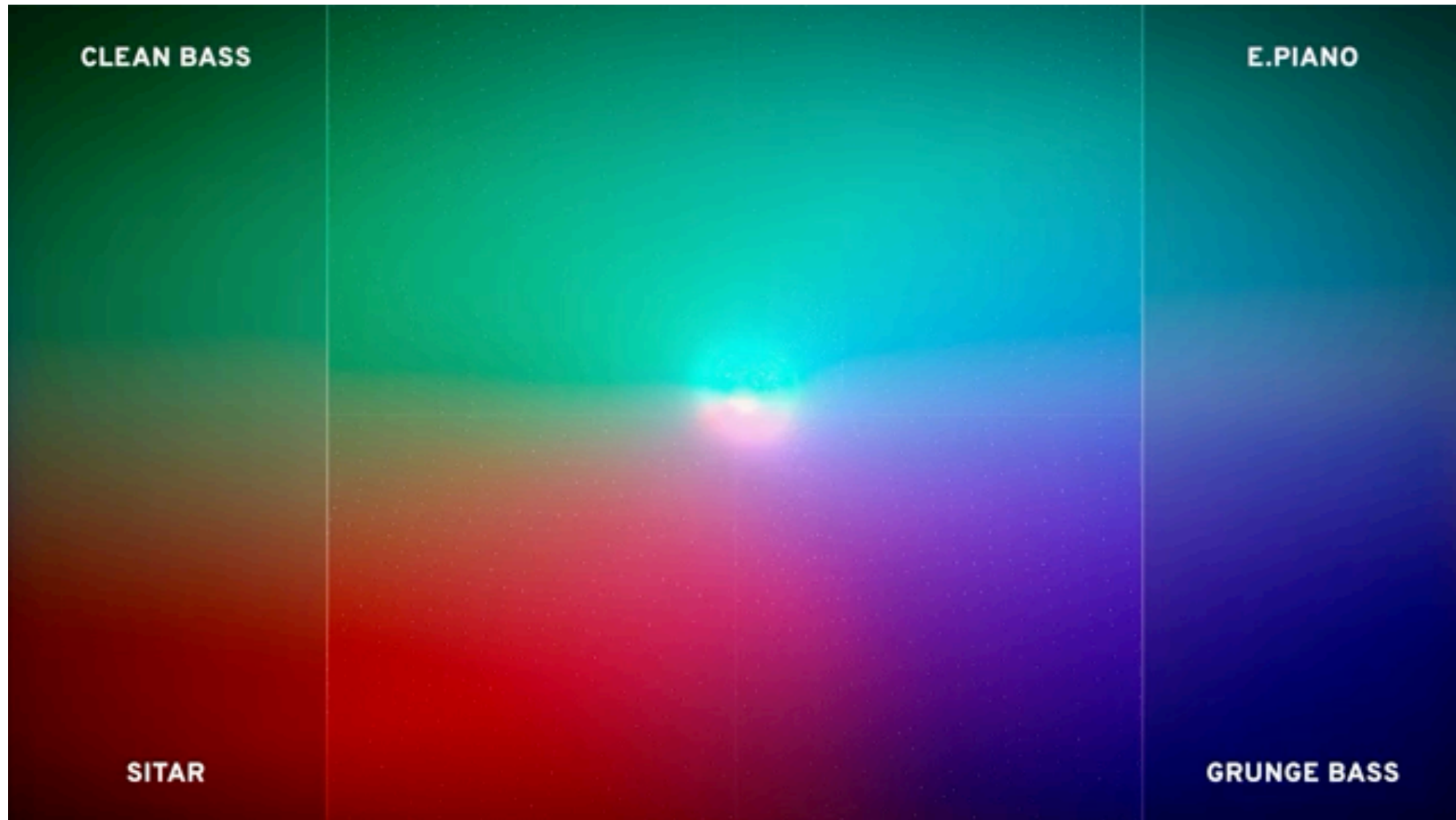
# Nsynthとは

機械学習（ディープラーニング）を使用し、音の波形から特徴を16要素抽出。

2つの音色をミックスする事で新しい音色を演奏することができるシンセサイザー

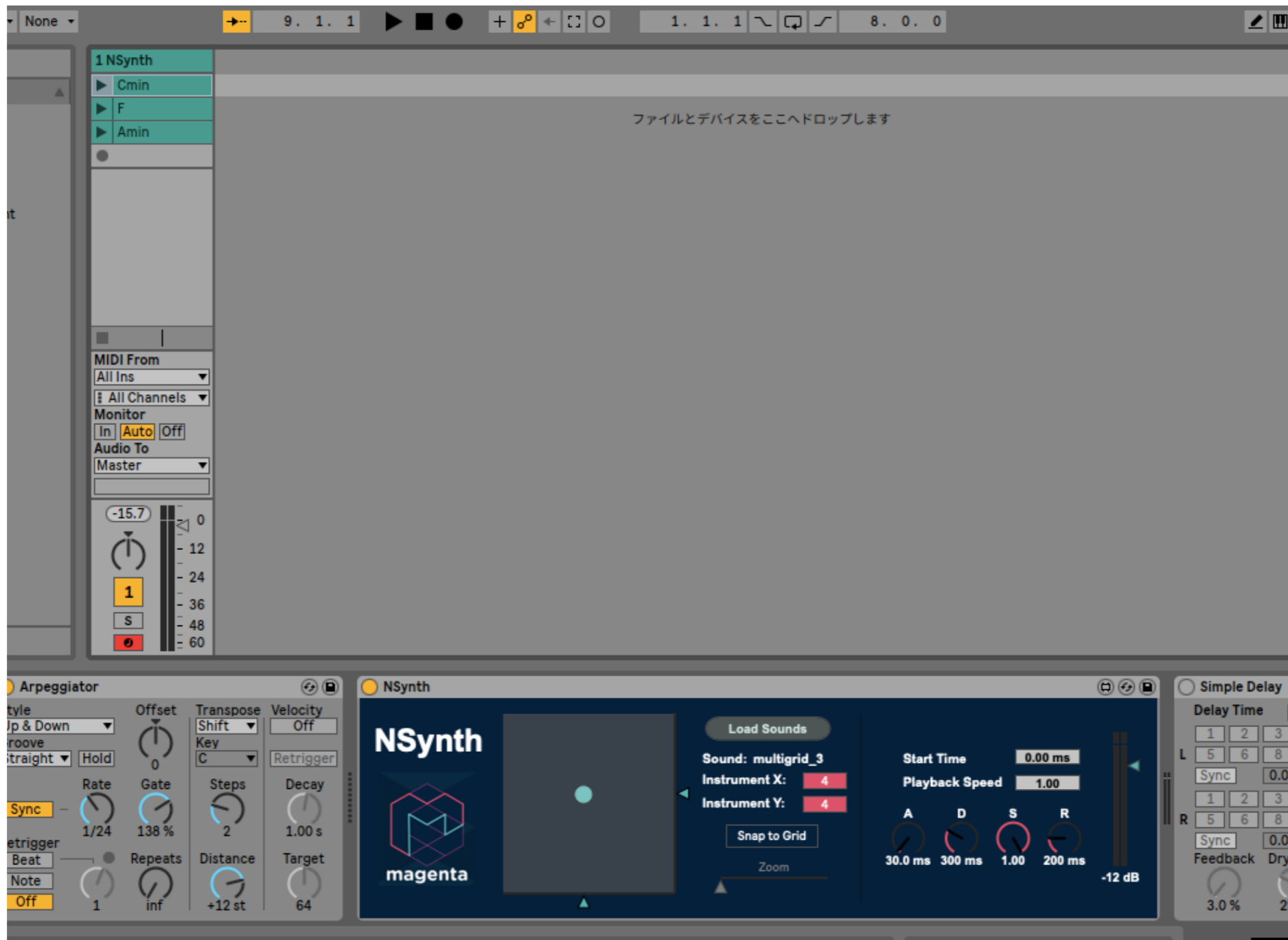


# Nsynthとは (動画)



# Nsynth

Ableton Liveのプラグインとして使用できます



# Nsynth

MAX for Liveでエディットや開発もできます

The image shows a screenshot of a Max/MSP patch titled "NSynth (unlocked)" running within a Live set. The patch is designed to process MIDI notes into audio using NSynth. Key components include:

- Input:** A "midinote 78 0" object provides the MIDI note number and velocity.
- MIDI Processing:** "midiin" and "midiparse" objects handle the MIDI data. "prepend midinote" prepends the note number to the message.
- Parameter Control:** "unpack 0 0 0 0 0 0 1" and "set \$1" objects manage a list of parameters. "s --n\_inst\_x" and "s --n\_inst\_y" objects store instance numbers.
- Grid and Sampling:** "poly~ poly-nsynth-sampler-grid 16 @args --nsynth @target 0" is the core processing object. It receives parameters like "Halfsteps between Notes" (4), "Notes" (13), "Num Points X" (7), "Num Points Y" (7), and "Min Pitch" (36).
- Envelope and Timing:** "pak 0. 0." objects handle envelope parameters. "A 30.0 ms", "D 300 ms", "S 1.00", and "R 200 ms" objects define the ADSR envelope. "Start Time" (0.00 ms) and "Loop Sta (ms)" (4.00 ms) objects manage timing.
- Output:** The audio signal is processed by a "plugout~" object with a gain of -12 dB.

The interface also shows the Live software's sidebar with a collection of instruments and an Arpeggiator control panel.

Ableton LiveとMAX  
を使用してMagentaプラグインを  
ご自身で作る事が可能です！



AIを使用したマスタリングソフト  
iZotopeのOzone8

# AIを使用したマスタリングソフト iZotopeのOzone8



# AIを使用したマスタリングソフト iZotopeのOzone8

他の楽曲の波形データを参照して、  
それに似たマスタリングを自動でしてくれる

# iZotopeのOzone8



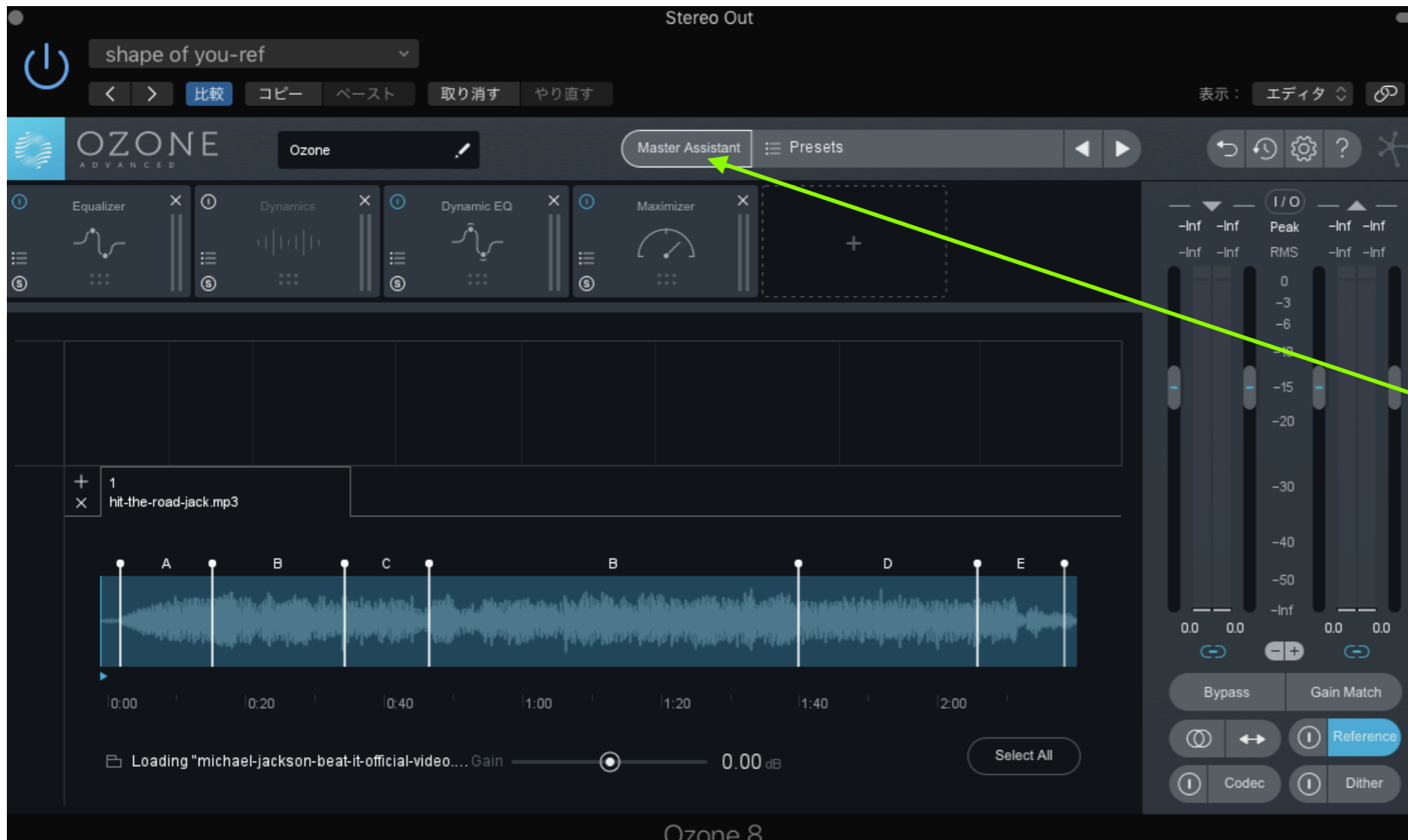
reference  
をクリック

# iZotopeのOzone8



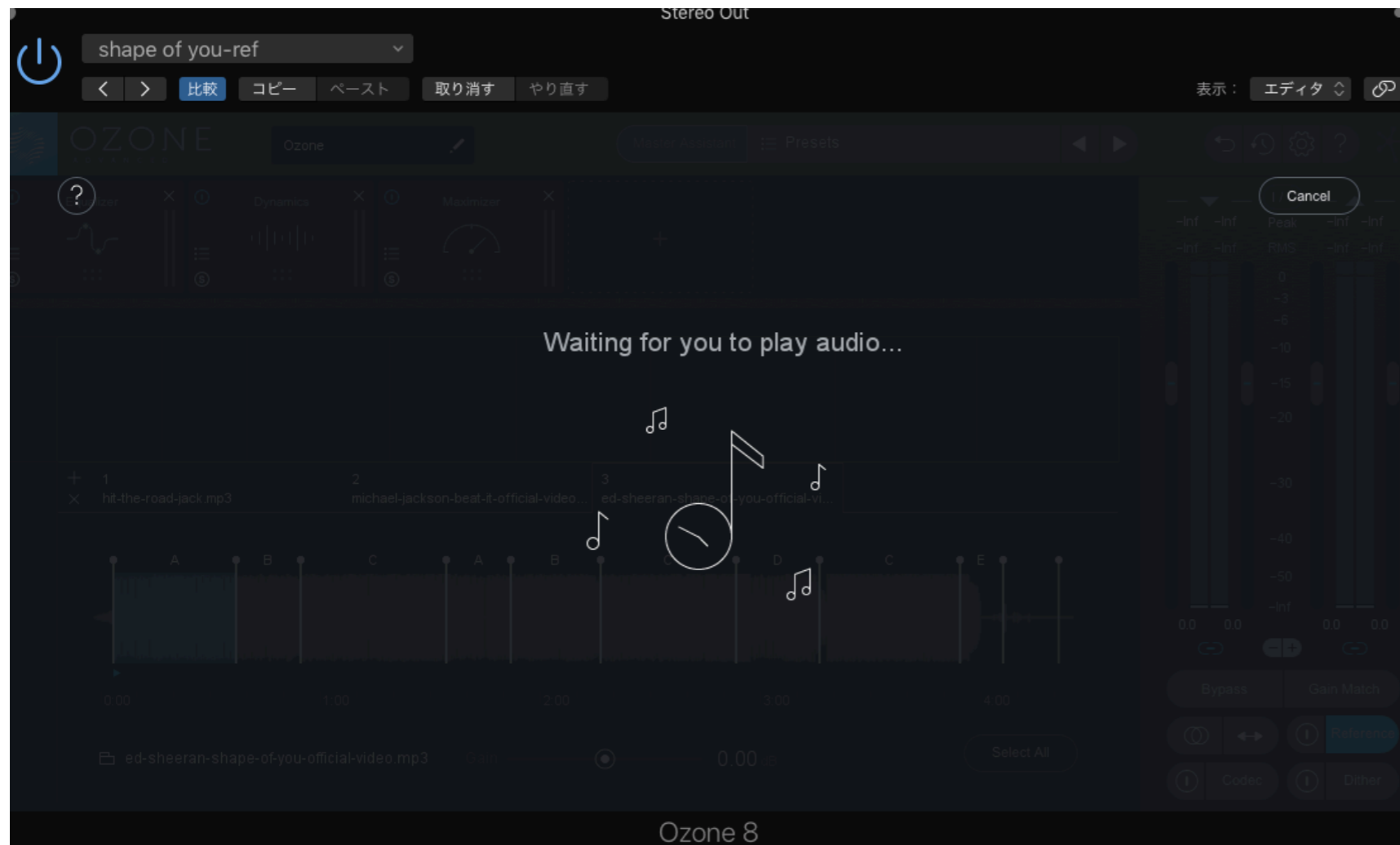
+をクリック  
してロード

# iZotopeのOzone8



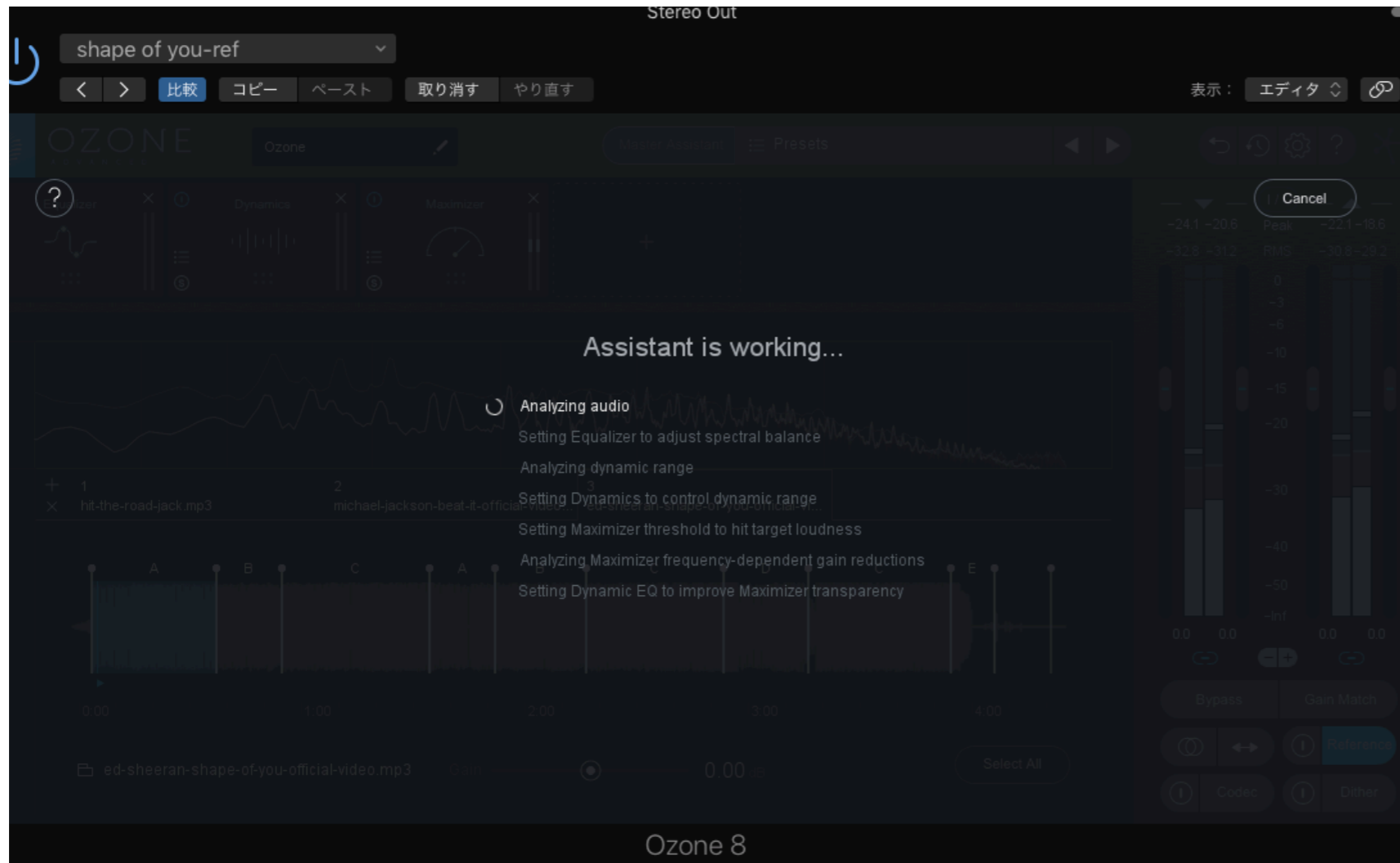
Mastering Assistant  
をクリック

# iZotopeのOzone8



準備画面になるので  
曲の1番ボリューム  
の高いところを  
再生

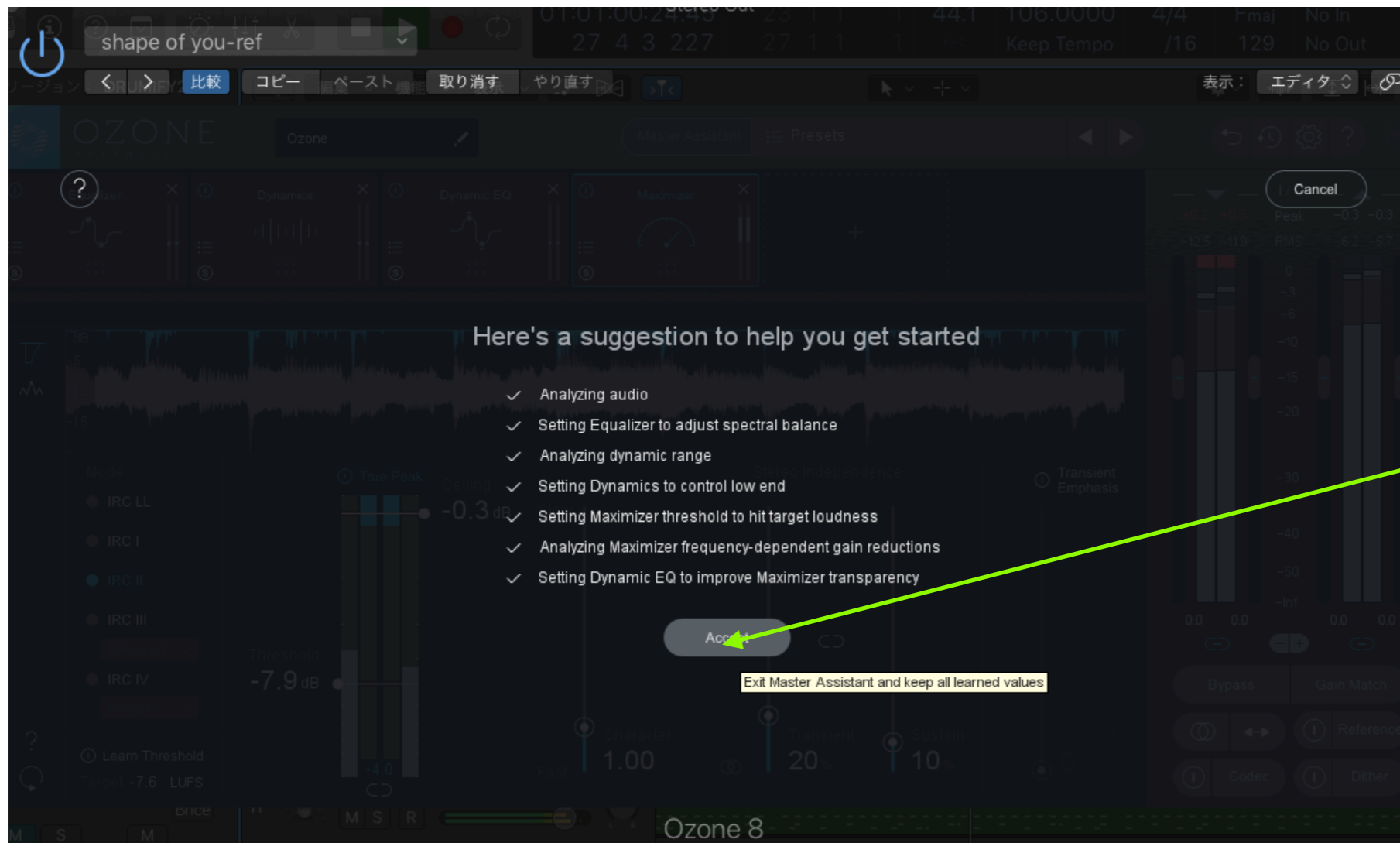
# iZotopeのOzone8



Masteringが  
開始されます



# iZotopeのOzone8



Mastering  
を採用の場合  
acceptボタン  
を押す

ディープラーニングのプログラミング基礎

Magentaの実践的解説

Tensorflowの基礎

# Magentaはtensorflowをベースにしています

```
import tensorflow as tf
```

tensorflowのtf.app.flags

```
FLAGS = tf.app.flags.FLAGS
```

モジュール

```
tf.app.flags.DEFINE_string(  
    'run_dir', None,  
    'Path to the directory where the latest checkpoint will be loaded from.')
```

```
tf.app.flags.DEFINE_string(  
    'checkpoint_file', None,  
    'Path to the checkpoint file. run_dir will take priority over this flag.')
```

```
tf.app.flags.DEFINE_string(  
    'bundle_file', None,  
    'Path to the bundle file. If specified, this will take priority over '
```

```
'run_dir and checkpoint_file, unless save_generator_bundle is True, in '
```

```
'which case both this flag and either run_dir or checkpoint_file are '
```

```
'required')
```

簡単な計算グラフのコードで  
Tensorflowの基礎を学びます

# tf計算グラフのコード

```
import tensorflow as tf

a = tf.constant(3, name='const1') #定数a
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b

# aとbを足す
add = tf.add(a,b)

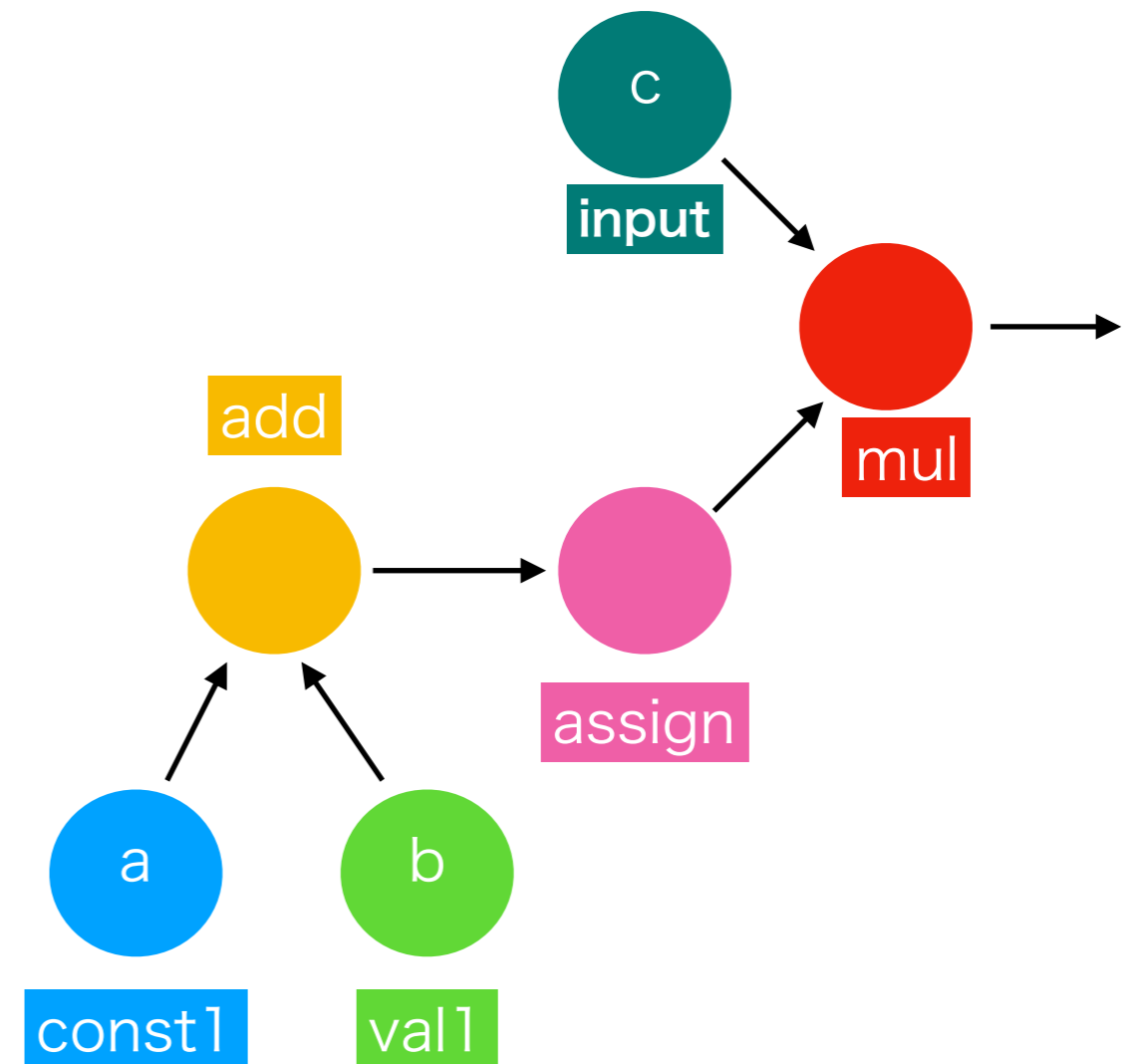
#変数bに足した結果をアサイン
assign = tf.assign(b, add)
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力c

# アサインした結果とcを掛け算
mul = tf.multiply(assign, c)

#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行
    sess.run(init)
    for i in range(3):
        # 掛け算を計算するまでのループを実行
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))
```

TensorFlowでは  
計算グラフは入力→処理→出力をノードとエッジで表す



TensorFlowの計算グラフにおいて各ノード（丸）はオペレーション（何らかの計算処理）を意味する。オペレーションは必ず何かしらのTensorを出力します。そのため、計算グラフのエッジ（矢印）はどのオペレーションの出力Tensorがどのオペレーションに入力されたかという流れを表します。

## tf計算グラフのコード

```
import tensorflow as tf
```

tensorflowのインポートはこの1行で行えます（要インストール）

```
a = tf.constant(3, name='const1') #定数a  
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b
```

tf.constantは定数を、tf.Variableは変数を入力するオペレーション

tf.constantは一度値を決めると変更不可

tf.Variableは後でも変更可能

tf.constantの引数はint（整数）もしくはfloat（少数）

tf.Variableの初期値にはそれ以外にtensorオブジェクトを与えることもできる

nameで名前を定義



const1

定数:3  
変更不可



val1

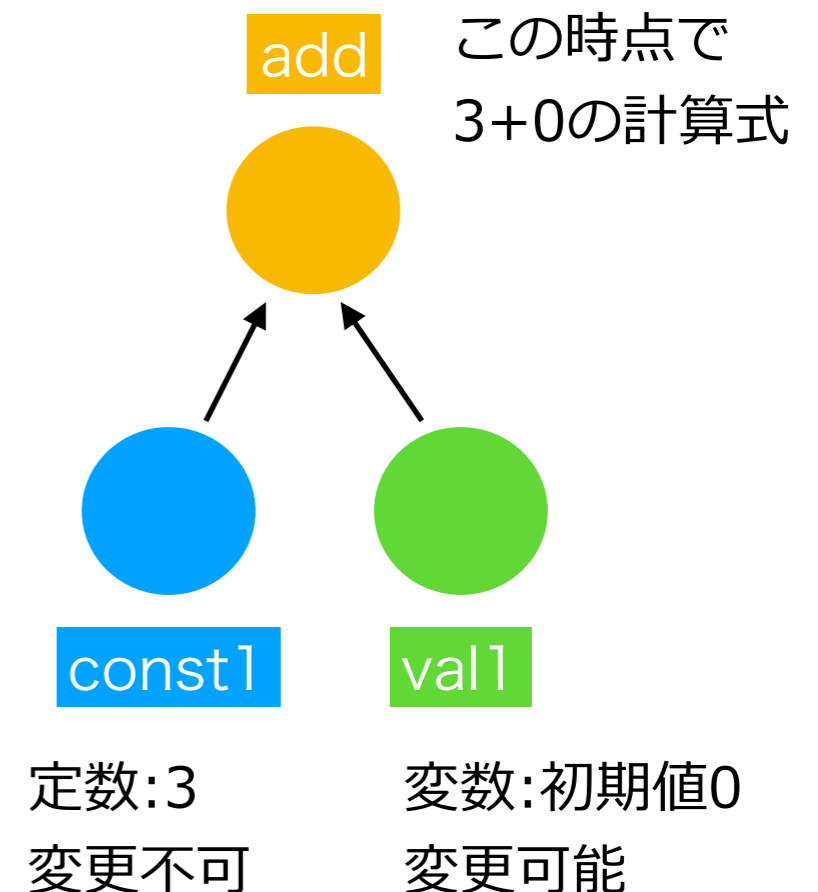
変数:初期値0  
変更可能

## tf計算グラフのコード

```
a = tf.constant(3, name='const1') #定数a
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b
add = tf.add(a,b)
```

tf.add()で定数a (3) と変数b (0) を  
加算する処理を計算グラフに追加  
3+0なので3

(tf.addは計算式であって実際の処理はまた別のオペレーションで行います)



## tf計算グラフのコード

```
#変数bに足した結果をアサイン
```

```
assign = tf.assign(b, add)
```

```
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力c
```

tf.assign()は値を変数に与えるオペレーションで

tf.Variable()を構成する要素の一つ

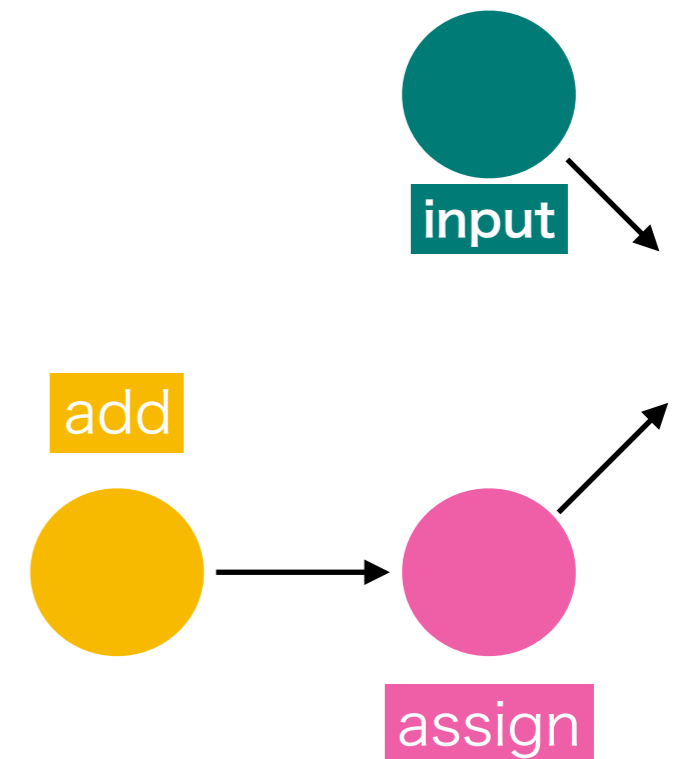
ここでは先ほどの変数b(初期値0)にaddの加算結果(3)をアサイン

tf.placeholder()は、実行時に引数の値を指定するオペレーション

tf.constantやtf.Variableの様に初期値を指定しない

型だけを決めておき、実行時に辞書型で値を決める

ここではc (名称input)をint (整数型) で指定





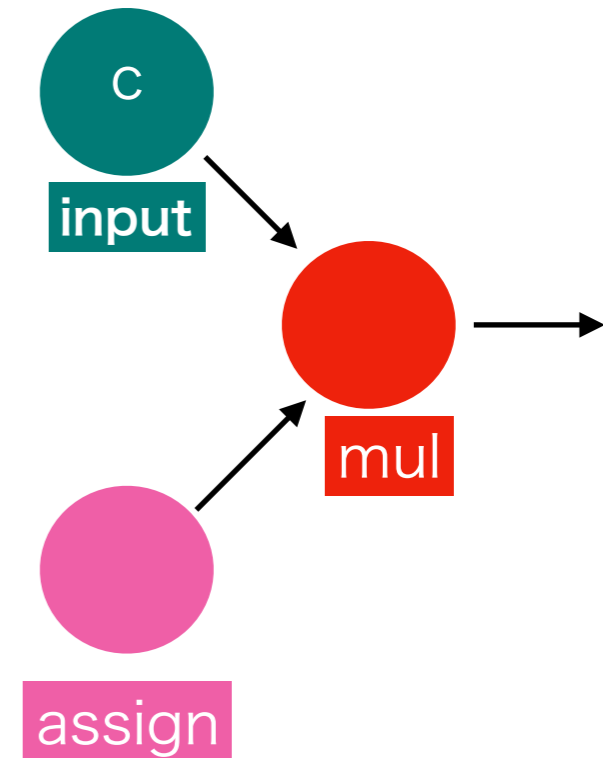
## tf計算グラフのコード

```
# アサインした結果とcを掛け算
```

```
mul = tf.multiply(assign, c)
```

tf.multiplyは乗算（掛け算）

ここではassign(3)と実行時にcとを乗算



## tf計算グラフのコード

```
#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行

    sess.run(init)
    for i in range(3):
        # 掛け算を計算するまでのループを実行

        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))
```

tf.global\_variables\_initializer()で変数を初期化

tensorflowで計算、グラフ表示する場合はそれまで定義した  
全ての変数をinitializerに従って初期化する必要があります

tf.Sessionで計算結果を作成したグラフを実行しprint関数で  
表示する事ができます

# tf計算グラフのコード

#変数の初期化

```
init = tf.global_variables_initializer()
```

```
with tf.Session() as sess:
```

```
    #初期化を実行
```

```
    sess.run(init)
```

```
    for i in range(3):
```

```
        # 掛け算を計算するループ回数
```

```
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))
```

sess.run(init)で変数を初期化

ループ文 (for文) で計算回数を指定

feed\_dictでtf.placeholder()にC:3を入力

この実行ではC=3となる

assignに3が入力、input (変数c)に3が入力

これを乗算するので出力は9

2回目はassignに6が入力、inputは変わらず3が入力

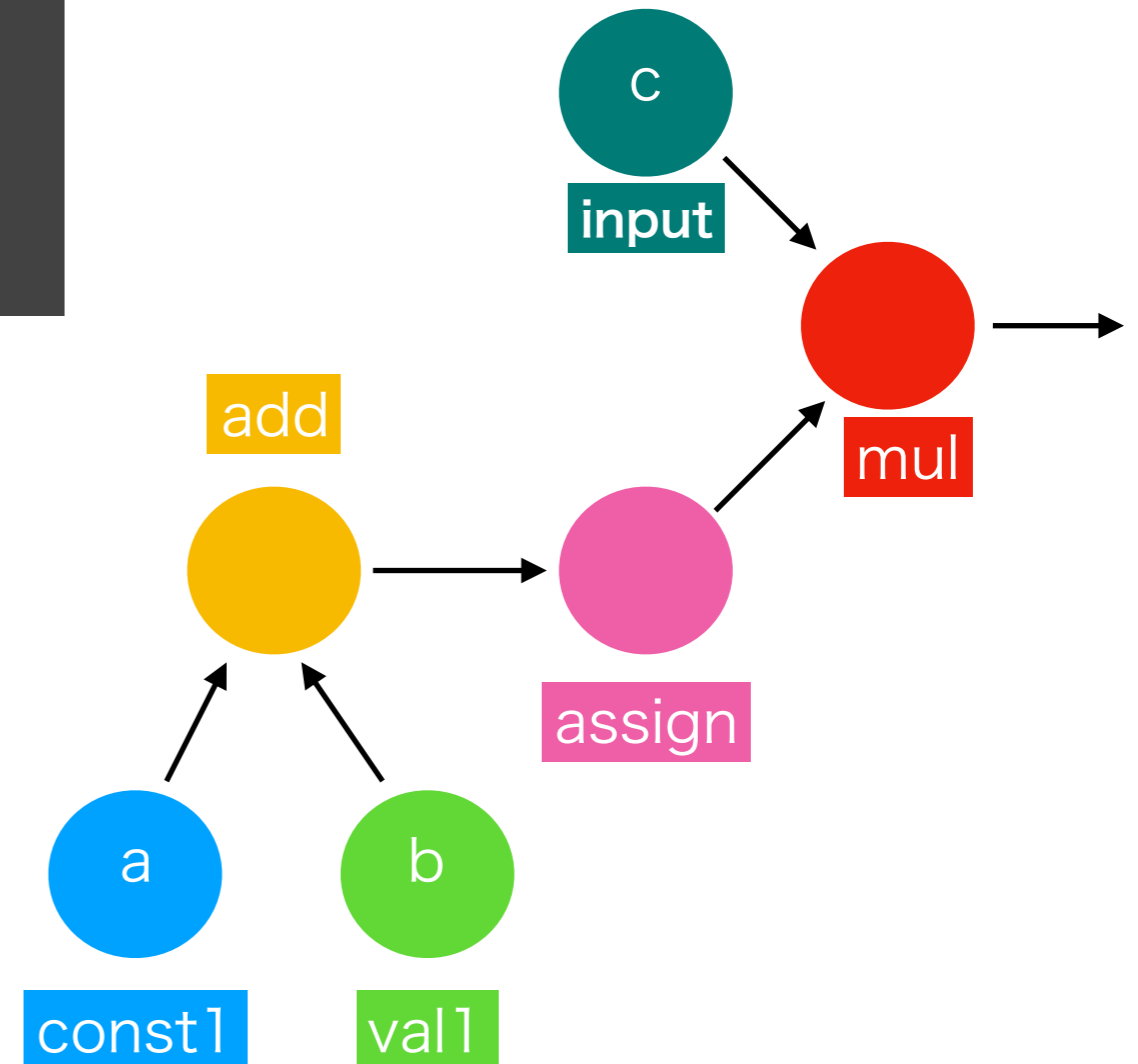
これを乗算するので出力は18

3回目はassign9で出力は27

ループ文でmulだけの実行の様に見えますがmulに関わる全ての計算式が実行されます

feed\_dictで

tf.placeholder()にc=3を入力



sess.run(init)  
で変数を初期化

# tf計算グラフのコード

```
import tensorflow as tf

a = tf.constant(3, name='const1') #定数a = 3
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b (1回目 =0) (2回目 =3) (3回目 =6)

# aとbを足す
add = tf.add(a,b) # (1回目 add=3+0) (2回目 add=3+3) (3回目 add=3+6)

#変数bに足した結果をアサイン
assign = tf.assign(b, add) # (1回目 assign=3) (2回目 assign=6) (3回目 assign=9)
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力cは(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))で定義

# アサインした結果とcを掛け算
mul = tf.multiply(assign, c) # (1回目 (assign=3)*c) (2回目 (assign=6)*c) (3回目
(assign=9)*c)

#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行
    sess.run(init)
    for i in range(3): # sess.runのmulに関わる計算式のみ繰り返し実行されます
        # 掛け算を計算するループ回数
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))
#(1回目 (assign=3)*(c=3))=9 (2回目 (assign=6)*(c=3))=18 (3回目 (assign=9)*(c=3))=27
```

## tf計算グラフのコード loop 1 回目

```
import tensorflow as tf

a = tf.constant(3, name='const1') #定数a = 3
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b (1回目 =0)

# aとbを足す
add = tf.add(a,b) # (1回目 add=3+0)

#変数bに足した結果をアサイン
assign = tf.assign(b, add) # (1回目 assign=3)
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力cは(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))で定義

# アサインした結果とcを掛け算
mul = tf.multiply(assign, c) # (1回目 (assign=3)*c)

#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行
    sess.run(init)
    for i in range(3): # sess.runのmulに関わる計算式のみ繰り返し実行されます
        # 掛け算を計算するループ回数
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3})) #(1回目 (assign=3)*(c=3))=9
```

## tf計算グラフのコード loop 2回目

```
import tensorflow as tf

a = tf.constant(3, name='const1') #定数a = 3
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b (2回目 =3)

# aとbを足す
add = tf.add(a,b) # (2回目 add=3+3)

#変数bに足した結果をアサイン
assign = tf.assign(b, add) # (2回目 assign=6)
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力cは(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))で定義

# アサインした結果とcを掛け算
mul = tf.multiply(assign, c) # (2回目 (assign=6)*c)

#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行
    sess.run(init)
    for i in range(3): # sess.runのmulに関わる計算式のみ繰り返し実行されます
        # 掛け算を計算するループ回数
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3})) # (2回目 (assign=6)*(c=3))=18
```

## tf計算グラフのコード loop3回目

```
import tensorflow as tf

a = tf.constant(3, name='const1') #定数a = 3
b = tf.Variable(0, name='val1') #変数b (3回目 =6)

# aとbを足す
add = tf.add(a,b) # (3回目 add=3+6)

#変数bに足した結果をアサイン
assign = tf.assign(b, add) # (3回目 assign=9)
c = tf.placeholder(tf.int32, name='input') #入力cは(sess.run(mul, feed_dict={c:3}))で定義

# アサインした結果とcを掛け算
mul = tf.multiply(assign, c) # (3回目 (assign=9)*c)

#変数の初期化
init = tf.global_variables_initializer()

with tf.Session() as sess:
    #初期化を実行
    sess.run(init)
    for i in range(3): # sess.runのmulに関わる計算式のみ繰り返し実行されます
        # 掛け算を計算するループ回数
        print(sess.run(mul, feed_dict={c:3})) # (3回目 (assign=9)*(c=3))=27
```